

三隊ぶんを全部おとしていったのであった。にわかづくりの落下傘にむすびつけた真空管の予備も、損傷なしにおちてきた。まだあたたかみののこっているような、ロシアパンのかたまりも、ブランデーやコニャックの角びんも、角砂糖の箱も、みなぶじで、かわいた草原のうえに安着した。

第二二キャンプは、本流の左岸をさらに数キロくだった、段丘のうえにたてられた。きのうきょう、夏晴れの空からは、ときおりはげしい夕立ちがおそって、そのあとには、なんともいえぬフレッシュな気分がただようた。うつくしいシラカンベの疎林をうしろに、二〇〇メートルばかりの河はばに、しろい中洲をのこしてながれるピストラヤをまえにしたこのキャンプは、この旅行中でもゆびおりの、風景にめぐまれたキャンプだった。上流をながめると、ひろいジン河の谷は、まるでピストラヤの本流かのように、一直線につらなり、本流のながれこんでくるせまい峡谷の出口は、ほとんどめだたない。テントのまえの切り岸には、シベリアヒナゲシのうす黄の花が、高貴な北國の色に咲いて、夕立ちのなごりの風にゆれた。対岸のひくい山のたたずまいとピストラヤとの流れが、ちょうど京都の東山と鴨川とおもわせるのもなつかしいのに、まもなく東の空に三日月がのぼった。もっとも、この鴨川は、逆に流れてはいたが。

本流の渡河

空から降ってきたアルコール類のたたりで、一八日の朝は、ふつか酔いに足もとのさだまらない者もでた。しかし、ひさしぶりの舌の豪遊に、意気は高らかだった。パンやソーセイジ、かんづめなどの食糧をもらったコサックたちも、上きげんのようにであった。小がらなパートリンが、おおきなロシアパンのまるいかたまりをかかえ

て、こおどりしていた姿は、いまでも眼にうかぶ。かわいそうに、かれらの食糧は、すでに底をついていた。ライムギの黒パンは、馬の脊でひと月もまれるうちに、すっかり粉になってしまい、肉も魚もないこのごろは、紅茶の Copp のなかに、ひとつかみの黒パンの粉をいれて、かきまわしてのみこむだけが、かれらの食事の全部だったのである。

いまままでに紹介しなかった、もうひとりのロシア人馬夫は、ポイヤールキン・アナフアーシイであった。かれは、しろっぽいブロードなので、すこしひげがのびてくると、ちょっとじいさんのようにみえ、馬あつかいもすこし手あらいで、第一四キャンプでは、ドラガチェンカへかえそうという人夫の選にはいりかけたこともあった。しかし、本隊の人数がすくなくなり、したしくつきあってみると、じいさんどころか、まだ二〇歳代の青年で、ひょうきんな、向う意氣のつよい、このもしい人物だということがわかってきた。われわれのつかう、山なかまどくとくの「エッホーッホ」というよびごえを、いちばんさきにおぼえ、とくいの声をひびかせたのもかれだった。じつはきのう、かれはちょっとした手がらをたてた。第一回の対空連絡地からここへくる途中、シン河をわたるのに、ガイブシャンは、四キロちかく上流の渡河点まで、まわり道をさせようとした。それを、ポイヤールキンが、二キロたらずのところに渡河点を見つけ、ガイブシャンの反対をおしきってわたって見たところ、上乘の浅瀬だったので、一時間ばかりとくをしたのである。ガイブシャンはだいぶんしょげていたが、ポイヤールキン先生は大とくだった。

この朝も、隊長は、ガイブシャンとポイヤールキンをえらび、例によって伴をリーダーにつけて、キャンプまえの本流がわたれるかどうかを偵察させた。三人は、まず手前にある浅い分流をわたって、中洲にたどりつき、みんなの心配そうに見まもるうちに、なにか相談しているようだった。ガイブシャンが、しきりに首をふっ

ているのが、ちいさくみえた。まもなくポイヤールキンが、いきなり馬をのりいれた。つづいて伴も。ガイブシヤンはじっと中洲のうえにのこっている。かれだけは、とうていわたれないと、見きりをつけているらしい。一〇メートル、二〇メートル、水はみるみる馬の腹をひたす。すーっとポイヤールキンの馬が流された。数十メートル流れて、あやうく馬首をたてなおした。まったくみこみはない。たづなをひかえてふりかえった伴に、隊長は引きあげの手まねきをおくった。

伴とポイヤールキンとは、ゆうべも、左岸ぞいに数キロ下って見たが、渡河点をみつけることはできなかった。われわれは、運を天にまかせて、きょうも左岸をゆくほかはなかった。出発準備のさしずの下るまえに、ガイブシヤンは、どこかへ姿をけしてしまっていたが、われわれはだれも気がつかなかった。もうひるまえになつて、隊列がうごきはじめようとしたとき、ガイブシヤンは、馬にむちうって下流からはせかえってきた。隊長のまえでとびおるなり、かれの発した第一声は、「ポイヤールキンのばかやろう！」というののしりごえだった。渡河点をみつめてきたというのだ。かれもやはり面子メンツをおもんじる東洋人だった。きのうから、案内役であるかれをさしおいて、ポイヤールキンがでしゃばるのを、腹にすえかねていたのだ。

一時間ばかりで、渡河点についた。百数十メートルくらいの本流をはさんで、兩岸にはみどりの壁のように、ケショウヤナギの河辺林がそびえ、すでに水かさのひいた流れが、河はばいっばいに浅くながっていた。そのなかに、流れをななめによこぎって、ひととき浅い瀬が、えんえんと上流にむかってつらなっている。浅瀬の長さ、ゆうに五〇〇メートル以上もある。申しぶんのない渡河点だ。ひるめしの準備のあいだに、ガイブシヤンは、浅瀬をわたってみることをいつかつた。とくいさを、いつもの無表情にかくしたかれは、たづなさばきもあざやかに対岸にわたり、豆つぶのように小さくなってから、またひきかえしてきた。「頂好テイコウ、頂好テイコウ」、「ハラシ

「ヨウ、ハラシヨウ」と声がかかる。おしまいに、大塚さんのモンゴル語で、「サイン、サイン」とほめられて、ガイブシャンはすっかりきげんをなおしたようだった。

まず、荷をおろした馬をつらねて、隊員たちは、流れのなかにのりだした。水は、あぶみにかけて足さきをあらうにすぎなかった。河のまんなか立ってみると、ピストラヤの流れは、さながら河辺林のかべにふちどられた廻廊だ。空のいろをうつして、足もとの流れもあおい。わたくしは、大ごえをあげてさけびだしたかった。

午後は、一二三キロも行程をのぼして、やはり快適な段丘の草原のうえに荷をおろした。土地はなかば湿性をおびているが、ひどい湿地はなく、そのなかをほそぼそとふみあとが通じていた。このあたりは、野々垣さんの記録によれば、「学校あと」としてされ、^①なにかオロチヨンの集合地のような気がしていたが、ゆけどもゆけども人気はなく、「ヤクト銀座」の夢はやぶれた。本隊の最大の任務のひとつは、ピストラヤ中流にすむトナカイ・オロチヨンの調査にあったから、われわれはようやく焦燥をおぼえはじめた。ただ、この第二三キャンプのすこし下流の河べりに、なかば朽ちたオロチヨンの小舟（オムローチン）が、

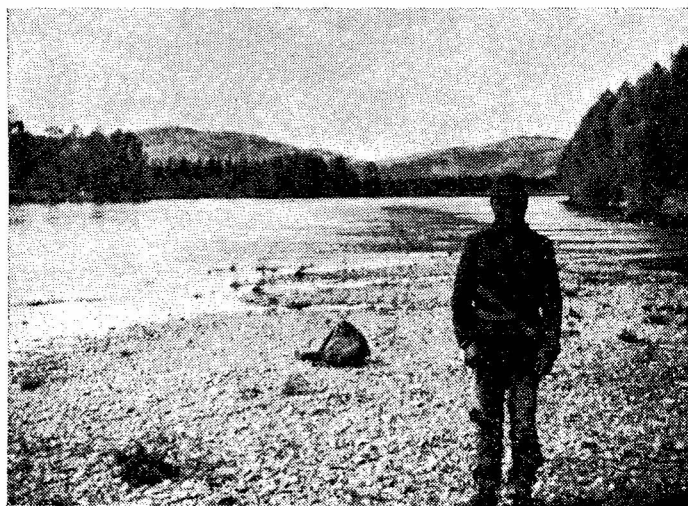


図 85. ピストラヤの渡河点にて。

わずかにかれらの存在をつたえた。

一九日の朝は、出発後二時間ばかりで、ウエルフネ・ウルギーチに達した。濕地のむこうに、この大支流をふちどる河辺林が、えんえんとのびて、本流につらなっているのは、すばらしいみものであった。河辺林のふちに、しろい雲のようにいっばいに花をつけた、小喬木のあるのに近づいてみると、シベリアコリンゴの花ざかりだった。ほそいヤナギやケショウヤナギの密生した河辺林の地表には、数日まえまでの氾濫のあとがなまなましいが、それにもめげず首をもたげたベニバナイチヤクソウの花穂が、ピンクのいろもあざやかに群れ咲いている。濕地のほとりのサクラソウ、礫原をふちどるカラフトヒメオダマキ、草原のヒロハコアヤメ、毎日十数種にのぼるこうしたうつくしい初夏の花が、あたらしくわたくしの胸乱のなかにつみこまれた。カラマツ林の地上にしきつめたイソツツジも、その特徴のある、ネギ坊主のような白い花のかたまりをつけはじめた。

河辺林をくぐりぬけると、その上流で支隊を増水になやませたこの河は、すっかり平水にもどり、めずらしい白い砂地の河原を、あさく網の目にながれていた。無数の色とりどりの蝶が、しめった砂にむらがって水を吸っている。まだ時間は一時まえだったが、われわれはここを去りかねた。この河の流域は、もはや玄武岩の地帯をはすれたのだろうか、しろい砂が、内地の山々谷々をおもいださせたからだ。あたらしいパンに紅茶と角砂糖、ソーセージの数きれという、ぜいたくなひるめしのむしろのうえに、兩岸のヤナギの枝からは、しろくほそく柳絮がみだれとんだ。汗ばむほどの暑さのなかに、ようやく姿をみせはじめたアブを追って、馬どもはしきりと首をふり尾をふった。

〔註〕

① 奇乾警察調査隊の報告(前出、一六ページ)には、この附近の山手のクリンダという高原に、数年まえまで一軒の小屋が

あり、ロシア人が住んで、狩猟者に食糧を買ったりしていたという。「学校あと」の由来はわからない。

河辺林の構造

満洲高原中央部の荒涼とした高原から、マンクイ河上流の低地におりてきた支隊の隊員たちを、うちょうてんにさせたように、大河をふちどる河辺林は、この大興安嶺の自然のなかにあって、もっとも生命力にあふれた世界である。夏のおとすれとともに、濃いみどりの葉のかたまりとかわった河辺林は、淡緑色の樹海のなかにまぎれこんできた、異質の南方的な植物社会という感じをあたえた。

まえにガン河下流についてのべた場合（七二ページ）とちがって、森林地帯にはいつてからの河川にそうて、山地の森林とまったくちがった樹木からなる河辺林の発達している原因は、もはや土壤水分の過不足によっては説明できない。まわりの山々に森林がある以上、もはや土壤水分の不足は考えられないからである。その原因をつきとめるひとつのかぎは、河辺林と蛇行帯（七二ページ）との密接な関係にもとめられる。河辺林の分布が、蛇行帯の範囲内にかぎられていることは、すでに注意しておいたが、ガン河下流の森林ステップ地帯では、蛇行帯のはばが数百メートルから一キロ以上におよぶのにたいして、河辺林のはばは、流れからせいぜい数十メートル以内にかぎられ、河辺林は蛇行帯の全部をしめていないことがおおかた。しかし、森林地帯にはいつてからの、ガンやピストラヤの中・上流では、河川はもっと若がえり、蛇行帯のはばはふつう四〇〇—五〇〇メートル程度となる。そして、高みからの展望や航空写真によると、河辺林の分布は、つねにびったりと蛇行帯と一致している。

蛇行帯の特色は、その部分の土壌が、水の浸蝕作用と堆積作用とによって、たえず攪乱と再配列とをくりかえしている点である。蛇行帯がこの程度のはばしかもっていないということは、水の流量のわりに流速がはやく

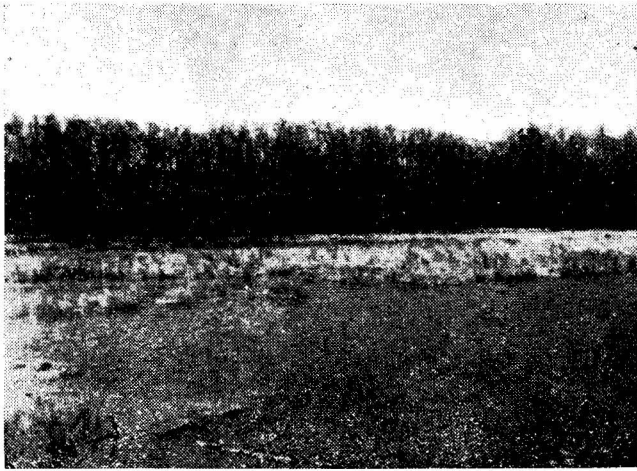


図 86. 早春の河辺林（ガン河中流）。前面に灌木性のヤナギが密生し、うしろはドロの森林。右端の部分はケジョウヤナギ。

土が生じていないのだと考えたほうがよいだろう。排水がよく、永久凍土層がなければ、湿地となることはない。ほとんど湿地、半湿地ばかりである河谷に、蛇行帯ばかりはくっきりと河辺林でおおわれている理由は、ま

て、流路の変化がかなりすみやかにおこるということであらう。極端な蛇行にはつきものの、三日月型の河跡湖がわりあいになく小規模なことも、これをうらがきする。この程度の流速に應じた堆積物は、流れに洗いだされた断面から想像して、泥や礫をてきとうにまじえた、おもに砂質の運積土であった。こういう土質は、濕地化をふせぐに足るだけの、じゅうぶんの排水力をもっている。そして、いっそう重要なことは、この運積土のなかには、永久凍土層が存在しないか、あるいはごく深くにあるらしい。さきのような断面では、五月下旬でも、すくなくとも三―四メートルの深さまでは、凍土層をみとめなかった。これは、排水のよいために、その上面がずっと低下しているのだとも考えられるが、それよりはむしろ、堆積後の年数があたらしくて、まだ永久凍

すこうした土壤条件にもとめるべきであろう。^①このように、森林ステップ地帯の河辺林と、森林地帯の河辺林とは、その成立の由来がすっかりちがうにもかかわらず、まったくおなじ種類の樹木からできているのは、興味がふかい。ガン河にそうても、どこにこの両者の境いがあるのか、まったくわからない。おそらく、ふたつの条件の推移は連続的におこるのであろう。

ところで、この河辺林をつくるおもな樹種としては、コウアンドロ、ケシヨウヤナギの二種類の大喬木と、エゾヤナギ、タイリクキヌヤナギなどの小喬木性のヤナギとがかぞえられる。コウアンドロは、北部大興安嶺の全樹木のなかで、もっともおおきくなり、なかには直径一メートル以上、樹高三メートルにちかいものもみうけられた。ケシヨウヤナギは、ドロにはおよばないが、やはり直径五〇センチ、高さ二五メートル前後にまでそだつ。河辺林にみられるヤナギ類は、かなりの種類にのぼるらしいが、完全な喬木となるのはエゾヤナギ（径二五センチ、高さ二〇メートルくらいのもがある）くらいであって、亞喬木程度のもではタイリクキヌヤナギがもっともおおいようであった。成長度の数例（ガン河上流第九キャンプ附近）をあげると、コウアンドロで直径一八センチ樹齡八二年、ケシヨウヤナギで二三センチ七四年、エゾヤナギで一五センチ六五—七〇年、などの数字をえ



図 87. 夏の河辺林（マンクイ川）。みごとなドロの大木と、よくのびたエゾノウラミズザクラの下生え。

た。山地林のカラマツでは、二〇センチに達するのに一五〇年くらいかかるのがふつうであるから、河辺林の樹木の成長度ははるかに大きく、めぐまれた土壌條件を反映しているようにおもわれる。なお、この三つの例のうち、エゾヤナギは最大級のもので、すでに成長の度がぶっていたが、ケシヨウヤナギとドロとは、成長の最盛期にあった。

河辺林の構造上の特徴は、これらの樹種が、ふつう大きさのそろった一斉林をなし、しかも混合林をなすことがすくなくて、一種類ごとの純林がおおいことである。また、森林のしたに、これらの河辺林特有の樹木の若木がほとんどみられないことも、いちじるしい特色である。そして、いろいろな樹齢、ちがった構成をもった小面積の林地の單位が、それぞれはきわめて斉一な構造をもちながら、おたがいに不連続にモザイク状にいりまじり、一見したところ、ひじょうにふくざつな様相をあらわしている。このふくざつな状態をひきおこしたプロセスには、いくつかのものが考えられる。まず、河辺林のあたらしくできてゆくプロセスを、つぎに考えてみよう。

蛇行がすすむにつれて、流れの曲りかどでは、狐の外がわが浸蝕されると同時に、内がわには、たえずあたらしい河原が堆積されてゆく。そういうところで、河辺林は、たえずうまれてゆくのである。図88のように、曲りかどの内がわには、なにも生えていない砂地から、ごく小さな芽ばえ、そのつきにはややそだった若木、というふうに、成木にいたるまでの種々の大きさの樹が順次ならんで、流路の変化していった経過をものがたっている。これで見ると、蛇行はゆっくりと連続的に進行するのではなく、大水ごとに段階的にすすむものとみえ、この配列は、おのおの樹齢のそろったいく列かの帯からなり、ぜんたいとして階段状をなしている。各列のあいだには、もとの水路の痕跡が、あさいみぞとしてのこっており、すでにじゅうぶん生育した森林のなかでも、こう

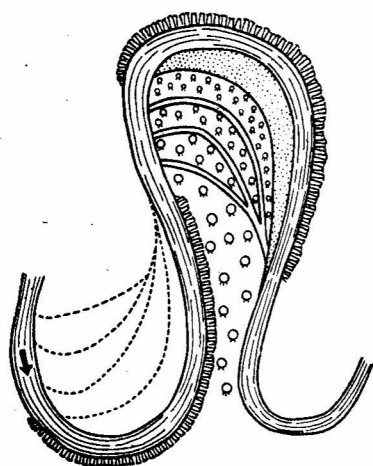


図 88. 蛇行と河辺林の新成との関係. 廣葉樹記号の大きさは、樹木の大きさをあらわす.

もうひとつの條件は、おのおのの樹種のもっている特性のすれである。じゅうぶんに生育した林地だけについていうと、ドロの林はつねにもっとも流れからとおいところであり、ヤナギ類は逆に流れに近いところにかぎられ、ケショウヤナギはその中間をしめている。したがって、あたらしく河辺林が発生してから、すでに年月がたち、流れからとおさかってゆくにづれて、ある程度の選択がおこなわれて、ドロが最後までこの確率のたかいことが想像できる。

したみぞをへだてて、林相の一変する場合がすくなくない。みぞの両がわで、地面の水準に差のあることもあった。

ところで、ドロやヤナギ類の若木がみられるのは、まさこうしたあたらしい河原にかぎられる。したがって、河辺林の構成は、その発生のはじめに、ほぼきめられてしまうことになる。この若木の発生状態をみると、いろいろな種類ものがまじっている場合もあるが、わりあいに純群落的なものがおおい。これがどういう理由によるのかは、よくわからないが、あたらしくできた河原が、若木の発生に適した条件をそなえている期間がみじかく、おもな樹種の種子のできる時期がくいちがっているとすれば、ある程度なっとくできる。いずれにせよ河辺林が、原則として、純林的な樹齡のそろった小面積の一斉林を単位としていることは、この発生のプロセスからみて、とうぜんのことといえよう。

また一方、蛇行が極度に達すると、流路はとつぜん大変化して、また直線にちかいかたちをとり、あたらしい方向にむかって蛇行をはじめ。そうすると、その流路は、すでに河辺林によっておおわれている地帯をとるようになるから、あたらしい曲りかどの外がわにあたる林は、どんどんけずりおとされて破壊されてゆく。大水のとき、根こぎにされたドロの大木が流されてくるのは、こうした場所からであった。曲りかどの外がわには、すでに成長しきった森林の断面があらわれ、内がわに新成されてゆく若い森林と、奇妙なコントラストをみせるのである。以上にあげた三つのプロセス——發生の経過、流れからとおざかるとともにおこる樹種の選択、破壊の経過——を頭においてながめると、ふくざつな河辺林の状態を、いちおう理解し、その歴史をたどることができた。

河辺林のもっとも外がわには、しばしばカラマツやシラカンベが侵入している。ひじょうに長い年月をおけば、これらの山地林の樹種が、ドロをおきかえるかもしれないが、ほとんどそういう例がみられないのは、それまでに破壊がおこることを意味しているのであろう。しかし、河を下流から上流へとたどってゆくと、まずドロが脱落し、つづいてケシヨウヤナギがなくなり、同時にカラマツが重要な河辺林の構成種となってくる。たとえば、ピストラヤにそうては、コンホの合流点ではドロはごくすくなく、河辺林は大部分ケシヨウヤナギ、ヤナギからなっている。しかし、支隊のおったナーラチ合流点から上流では、河辺林の九〇パーセントまでがカラマツによってしめられていた。河辺林のカラマツは、やはり附近の山地林のものにくらべて、ずっとそだちがよく、大木がおおい。もっとも上流までのこるものは、ヤナギ類、とくに灌木性のヤナギであって、湿地のなかを流れる小川のほとりに、一列にヤナギの灌木がならんで、とおくから流れの所在をしらせた。また灌木性のヤナギは、中・下流地方でも、わりあいに安定した流路——たとえばまっすぐに流れている部分——の水べりにそう

て、帯状に密生しており、あだかもそのつくる障壁によって内部の河辺林を保護するかのようにはみえた(図86)。

河辺林内の下生えにも、特有のものがおおい。流れにちかい部分は、しばしば水びたしとなるので、あまり下生えはなく、ベニバナイチヤクソウなどをみる程度であるが、よく発達したドロの森林のなかなどは、ぎっしりと下生えでみだされている。大灌木層には、エゾノウワミズヅクワがもっともおおく、シベリアアハンノキ、アカサンザシなど、中・小灌木では、シロミノミズキ、ヤマハマナスなどが、特有の種類にかぞえられる。そのほか、キタナナカマド、ホザキナナカマド、キタシモツケ、エゾシモツケ、マンシュウクロスグリ、クロマメノキ、ケヨノミなども、かならずしも特有ではないが、河辺林のなかや林縁に、ふつうにみいだされた。

〔註〕

① この点で、図版八ページのバノラマ写真の右端にある、ヤンギール川の河辺林は、興味をひく。この写真で見ると、蛇行する流れのとりかこむ半田部にだけ河辺林があり、ぜんたいとしてじゅず玉をつらねた形となっている。こんな場合は、おそらく長年月にわたって流路が安定していたのち、最近になって、なにかの理由で蛇行がはじまり、まだ第一回めの蛇行がおわっていないのであって、あたらしく堆積された土壤のみ河辺林がそだちうるのである。

か ら ま わ り

ウエルフネ・ウルギーチの快適なひるやすみは、なかなかおわりそうもなかった。旅のはじめのころには、馬夫たちの大陸的なひるやすみが、わざとゆっくりしているようにみえて、もっぱらせき立てるがわにまわっていたわれわれが、いまでは、逆にせきたてられるしまつであった。こちらからなにもさしすしなくても、勤勉なロシア人たちは、じぶんたちから休みをきりあげて、せっせと馬に荷をつみ、隊員たちの車座になっている一角だ

けが、いつまで立ってもかたずかないのに業をにやして、「スカレ、スカレ」とせきたてるのであった。

このとき、ガイブシャンは、下流にあたるピストラヤの対岸はるかに、山火事の煙のあがっているのをみつけた。煙の立つところには火があり、火のあるところには人がいるはずだ。そうだ、あそこにはオロチョンがいるにちがいない。つきつきと予定の行程がおくれているときではあったが、あすはあの煙をたすねて、なにがどうあっても、本隊の面目にかけても、オロチョンをさがしだせ、というのが、隊長の決定であった。その方針にしたがって、われわれは、つぎの第二四キャンプで、またもや一日の滞在をすることになった。

ウエルフネ・ウルギーチから、山すそにそうて、四キロばかりカラマツ林をぬけ、本流に近づこうとするところで、めずらしくひろびろとしたミズゴケ濕原にであった。シン河の合流点らしい、谷はひろく、濕地もとぼしくて、かわいた草原がつづいてきたが、このあたりから、やや谷がせばまり、ふたたび濕地がはびこってきた。

対岸にそそぐ支流ツングスカンには、おおおとイエルニクがひろがっていたし、このミズゴケ濕原は、その面積の点では、この旅行中第一のものであった。ミズゴケの表面は、イソツツジ、クロマメノキ、ホロムイツツジ、サカイツツジなどの小灌木でおおいつくされ、まばらにいじけたカラマツが侵入してはいたが、すくなくとも一キロ以上にわたってつづいた。本流に近づくとつれて、野地坊主がまじってきたとおもうと、すぐに、野地坊主にうすめられた旧河道があらわれ、つづいていくつもおなじような凹地をよこぎるうちに、濕地はいつのまにかかわいて、ヤマナラシやシラカンバのまばらに生えた切り岸にでた。このように、河に近づくと逆にならぬ土地のかわく現象は、大河の谷では、ごくふつうにみられるのである。

あくる朝、伴・小川・折口の三人は、ガイブシャンとニコライとをつれて、オロチョンさがしに本流をわたっていった。しかし、まる一日山のなかをうろつきまわったあげく、あたらしい山火事のあととはみつけたが、人の

けはいもなく、わずかにトナカイ・オロチョンのこわれた鹿笛をひろっただけだった。かれらは、すっかり失望して、つかれてかえってきた。

ひるはアブ、夕ぐれと朝にはカが、そろそろ猛威をふるいはじめたので、夕食には蚊いぶしのまわりにあつまらなくてはならないようになった。漢河隊との交信のために、大塚さんだけはひと足おくれ、みんなは、わりきれない気もちで、

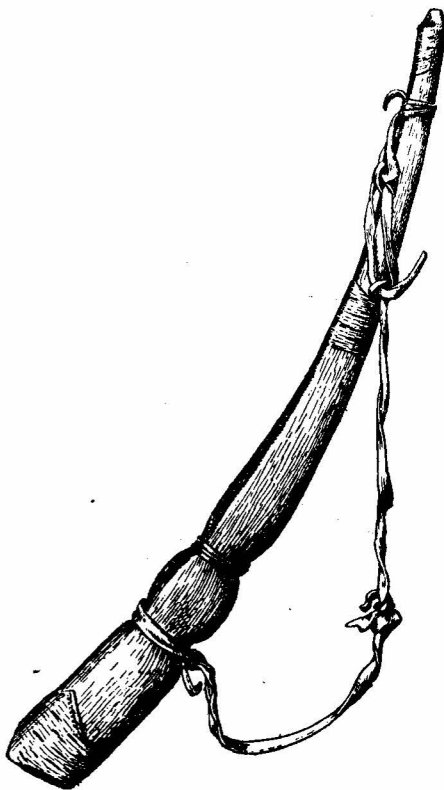


図 89. トナカイ・オロチョンの鹿笛。シラカンバの材をくりぬいてふたつあわせ、丈夫なツルでしめつけてつくる。長さ 80cm, 吹かずに吸ってならし、おすジカのなきごえをまねてめすジカをおびきよせる。

ぼそぼそと飯をくいはじめた。まったく予想もしていなかった、支隊基地安着の第一報にぎって、大塚さんが無電テントからとびだしてきたのは、まさにその

瞬間だった。ゆううつはけしとび、虎の子のようにのこしておいたウイスキーの角びんは、あつというまにからになった。

つづいて、つぎの朝には、くわしい報告がはいった。その電文のおわりに、なにげなくつけくわえられた一節をみてわれわれはとびあがっておどろいた。「漢河隊は馬九頭トナカイ三四!」、どうみてもそれは、まさしくト

ナカイ三四頭と読めた。どこへいっても、原住民としたしみ、手なづけることとうまい森下さんの顔が、眼のまえにうかんだ。森下さんが、トナカイ・オロチョンをつれていることを、いままでかくしていたのは、いざとなつてからあつといわせてやろうという下心だったことは明らかだ。民族調査をうけもつていた伴は、すっかりしよげこんでしまい、小川はかんかん腹を立てていた。支隊は白色地帯をみごとに突破して、ひと足さきに縦断を完成し、漠河隊はトナカイ・オロチョンの生活調査に成功した。いったい本隊はなにをしているというのだ。飛行機から慰問袋をおとしてもらうために、この大部隊がのろろとあるいたというのか。

「まあそう悲観するなよ。漠河隊にはオーコリドイはないぞ。」

今西さんはこういった。そうだ、われわれにはオーコリドイがあつた。本隊の、あとモ・ホまでの行程は、しかれたレールのうえをゆくようなものだ。この旅の後半を、なるだけゆたかな内容のものにすることが、われわれにのこされたしごとだった。そのためにも、まずオーコリドイへ。われわれはきおいたつた。

このキャンプにちかい林のはずれに立つと、オーコリドイは、ふたたびゆくてにその全貌をあらわしていた。南からあおぐと、とがった主峯の手まえに、まるいあたまたの前山がひとつあつて、主峯はその肩からのぞいていた。ふたつのいただきは、どちらも森林限界をぬいており、ことに主峯のほうは、森林のない部分が、ゆうに三〇〇メートルぐらゐあつた。双眼鏡のレンズには、くろくハイマツらしいもののみだらがみえ、頂上ちかくはそれさえもなく、草か石か、ただ黄褐色のものがひろがり、ななめにさした夕日のいろに、うすあかく光っていた。山のすがたは、ナプタルグイよりも、いちだんとすっきりしている。オーコリドイの魅力は、すっかりわれわれをとらえてしまった。

二一日には、オーコリドイから西に流れでる、小さな支流の合流点につき、ひろい本流の中洲のうえにテント

をもうけた。一日の行程は、かならずしも長くはなかったが、ピストラヤの谷は急にせばまり、また一日に二三カ所ずつ、東西にはしる尾根が河にせまって、おおくは山ごえしなければならなくなったから、かなりの強行軍であった。あすからの登山には、隊長以下七人と、ポイヤールキン、パートリンのふたりの馬夫、馬二頭がくわわることになった。

オーコリドイ

二二日のひるすぎ、われわれは、キャンプをでた。ねぶくろと一泊ぶんの食糧とを馬につんで、めいめいは、ちいさなリュックでみがるにいでた。合流点のカラマツ林をぬけると、谷はからりとひらけた。ゆるやかな谷のそこは、例のとおりイエルニクにおおわれ、そのなかにまで進出してきた栄養不良のカラマツのこずえのうえに、オーコリドイの主峯は、うつくしい富士山がたにそびえていた。前山は、南がわの尾根にかくれて、もうみえなかった。夕立ち雲がすぎるにつれて、頂上の灰いろが、はなやかなあかみをおびるかとおもうと、きゅうにまた鉛いろにかわる。いちだんと濃いハイマツのしげみのあいだをうすめている、あの灰いろの正体は、いったいなんだろうか。レンズに眼をこらしてみると、どうやら石ころのようでもあり、枯れた草原のようでもあった。

濕地と礫原とカラマツ林とが、モザイクのようにいりまじった谷には、なんのかわったこともなく、すらすらと道ははかどった。やがて谷はふたつにわかれて、それぞれオーコリドイの左右の肩へとはいってゆく。われわれは、頂上からこの谷の二又にむかって、まっすぐにおりている尾根を、のぼり道にえらんだ。山はもうみえな

くになった。もういちど引きかえして、よく山をながめておきたいようななごりおしさが、わたくしの心をかすめた。

すぐには尾根にとりつかないで、われわれは、しばらく谷の右叉をさかのぼった。六時まえごろ、ささやかな流れとなった谷のほとりに荷をおろして、ゆっくりと夕食をとった。二食ぶんの飯をたき、あたたかいみそ汁に野生のエゾネギ、からい生みそといういつものこんだてを、などやかに二時間ちかくもたのしんだらうか。時間のあいまいなのは、時計がなかったからだ。支隊とわかれて二〇日のあいだに、運わるくつきつきと時計が故障をおこし、たったひとつのこったのを、キャンプにのこっている大塚、郭の無電班にゆずらなければならなかったのである。

夕食がおわると、まっすぐ尾根にとりついた。例によって、ムラサキツツジの密生した、急な南斜面であった。しかし、そのブッシュのなかに、うすもも色の雄花をつけたハイマツが、ちらほらまじっているのは、英吉里山いらいだ。すでにかんりの高度に達しているのだった。急なぼりはまもなくおわって、たいらな尾根すじにでた。尾根のカラマツ林はよくすいていたが、ところどころの倒木と生えそろうた若木とが、しきりに馬の足をとめた。やがて、林のなかでは、さすがの北國の夏の日もくれかかかってきた。カラマツ林のしたは、ひざの高さにはえそろうた、じゅうたんのようなイソツツジのしげみだから、夕ぐれが近づいても、足もとにはなんの不安もない。ちょうどイソツツジは、ネギ坊主のような白い花をつけて、みどりのじゅうたんにうつくしく星をちりばめていた。夕やみのはいよってくる林のなかを、先頭に立ってあるいてゆくと、足もとから、ひとつひとつの白い花がうかびあがって、しずかな感傷のなかにわたくしをさそいこみ、しばらくは、うしろにつづく人たちのことをわすれさせた。

ちょうどそのころ、尾根の林のなかにうもれて、おおきな岩のかたまりがすわっていた。ちかよってみると、しろっぽい石英斑岩であった。みあげると、そのいただきは、カラマツのこすえをぬいているとみえて、まだな



図 90. 午後10時のオーコリドイ。およそ800メートルの地点からあおぐ。

ごりの夕日がさしていた。そのあかるさにさそわれて、いただきにはいあがってみると、すばらしい眺めがひらけた。ちょうどこの日は、北國の夏でもいちばん日のながい、夏至の日だった。夏至の日の午後一〇時の太陽は、世界をいちめんのばら色にそめ、その光のなかに、オーコリドイは、根ばりゆたかにつたっていった。頂上への距離は、まだなかなかとおい。もう六合目くらいにはきているのに、足もとのこすえから山腹につらなっているカラマツの樹海は、すそ野をおもわせるほどなだらかなカーヴをえがいている。頂上はどうやら礫の山らしく、森林限界のあたりは、森林とハイマツと礫原とがいきまじって、ふくざつな眺めをくりひろげていた。そこからしたは、山腹をうすめつくした、ただいちめんの樹海であった。そのなかにぽっかりとひらいた、足もとのこすえの切れめは、ほらあ

なの入り口のようにくらい。やがてわれわれはまた岩をおりて、ほらあなのやみのなかに吸いこまれた。尾根がしだいにひくまって、いちめんに平らな中腹の斜面にさしかかったころ、日はまったく暮れはてた。林

のなかは、眞のやみとなった。ほんとうの深いやみのなかでは、懐中電燈の光などは、なんのやくにも立たなかつた。なまじっか眼先きのものだけがみえて、かえってぶっそうであるけなないのだ。

まっくらななかを、先頭に立った隊長は、だまってまっすぐにのぼってゆく。このやみ夜を、隊長はよっぴてあるきとおすつもりなのだろうか。この隊長にしたがって、南や北に旅をつづけてきたわたくしたちには、この夜行軍をたのしんでいるワンダラー今西さんの氣もちが、よくわかっていた。しかし、満洲からくわわった隊員や馬夫たちは、不安におそわれたのだろう。うしろのほうから、ぼつぼつと不平のこえもきこえてきた。けれども、この原始林の夜行軍の魅力は、いつのまにかみんなの心にしみとおってきていた。しばらくたつと、もうだれも不平をいわなくなった。必要なこと以外には、口もきかない。神経は、すっかり足にあつまっている。さいわいに倒木はすくなくなった。足もとは、あいかわらず、やわらかいイソツツジの小枝ばかりだ。数歩ごとに、やみのなかから、とつぜんカラマツの幹がはなさきにとびだしてくる。それを右左にばっとさけるばかり、あとは足にまかせて、ただ高いほうへ、高いほうへとたどっていった。

いつか林のうえには、月がでていたらしかつた。ときおり、こすえの切れめから、かすかに白い光がながれこんだ。またひと時、ふとふりかえってみると、こすえをおして、西の空にうすじろい光がのこっているのに氣づいた。月ではない。もう日がおちて何時間にもなるのに、どうしたことだろうか。ためしに磁石の針をながめてみると、そうではなかつたのだ。うすくしらんでいるのは、北の空だつた。北緯五二度の北國では、日は、西にしずむというよりは、北西の空にしずむ。そして、タヤけのあとの残照は、きえることなく北の空をまわつて、朝になれば、なにくわぬ顔をして、東の空に朝やけとなつてでてくるのである。アムールの流れをへだててこそいるけれども、ここはもうシベリアだつた。「西はタヤけ、東は夜あけ」とうたわれたシベリアだつた。た

またまたその北國の夜のいちばんみじかい夏至の日に、大興安嶺の最高峯のひとつに夜討ちをかける。われわれは、その偶然を、心からたのしんでいた。

こうしてどのくらい夜行軍がつづいたのか、時計のなかったおかげで、わたくしにはまったくわからない。ま
してしまでは、無限にながかったようでもあるし、あっけなくみじかかったような気もする。とにかく、ハイマ
ツ帯に達して、それはおわりをつげた。だまってのぼってゆくわれわれのまえに、とつぜん黒いかべのようなも
のがあらわれた。懐中電燈をだしてみると、身のたけよりもずっと高く密生した、ハイマツのしげみだった。い
くらわれわれでも、馬をひいて深夜のハイマツくぐりはできない。カラマツに馬をつなぎ、たき火のまわりにね
ぶくろをのべて、われわれはしばらくまどろんだ。

氣づいてみると、ほのぼのと夜があけはじめていた。ふだんは、ねおきのわるい連中も、すぐとびおきた。さ
すがに冷えた。ゆうべたいためしも、ぼろぼろに冷えていた。ここに、馬と寝具そのほかをのこして、まるでゆ
うべから休みなくあるきつづけているような気もちで、ふたたび登りがはじまった。朝の光でみると、ハイマツ
は、まだ林のなかにかたまりをなして散らばっているだけで、さしてさまざまげにはならない。しかし、もう森林
のつきるのも近い。足はしだいにはずんで、いつか、かけのぼるような足どりになっていた。

とつぜん、ぱっと林がきれて、ひろい礫原があらわれた。はずみで、われわれは、おもわずその半分くらいま
でかけのぼっていた。この礫原が、われわれをまよわせていた、オーコリドイの頂上の灰いろの正体だった。こ
の第一の礫原は、まわりを、森林限界にちかい、いじけたガラマツ林にとりかこまれた、中くらしいのひろさのも
のだった。ここは、おもいもうけなかった、すばらしいいろどりにみちみちていた。そのうえは、ありとあらゆる
種類の地衣類で、いちめんうすめつくされて、礫のでこぼこは、わずかに地衣のじゅうたんの凹凸としてう



図 91. 森林限界附近から西にむかっでの展望. 白く雲のあるのがピストラヤの谷. 左手の連山はジン山脈.

かがわれるにすぎなかった。礫と礫とのすきまには、ミヤマハナゴケやハナゴケなどの脊のたかい種類が、礫の表面には名も知らないものとたけのひくい種類が、そして、とくにとびでた岩のあたまには、イワタケの類がこびりついていて、そのかたちには、およそ地衣類のありとあらゆるかたちをあつめていた、といってよいだろう。このじゅうたんの地色は、ミヤマハナゴケのあわい青緑色であって、あとは、むらさきからうすもも色、黄いろ、茶いろにいたる、さまざまの色どりをあつめていた。ただ、そのどれもが、地衣に特有な、あの不透明なあわいしろさに統一されていて、ぜんたいに、なにか夢のようなうつくしさをもっていた。その色彩は、われわれのこれまでの経験の世界からとびはなれた、一種天上世界的な印象をあたえた。それも、しろいきものをきた、西洋の神さまのできそうな「天國」のかんじである。もっとも、このハナゴケにいのちをささえているトナカイにいわせれば、そこはトナカイの天國だったかもしれないが。

どの地衣も、いっばいに朝つゆをふくんで、海綿のようにやわらかかった。靴にふまれても、足をのけるとベネのようにはねかえって、なんの足あとをものこさなかった。このなごりおしいじゅうたんがおわると、またカラマツにまじったハイマツくぐりになった。しかし、



それはもうながくはつづかない。まもなく、第二の地衣原があらわれた。第三、第四の地衣原をむかえるころには、いつか森林限界はすぎさって、あたりは、ハイマツの海となっていた。

それにつれて、しだいに眺めがひらけてきた。うしろにのこしてきたピストラヤの大縦谷をへだてて、対岸のジン山脈が、しだいにせりあがってくる。大興安嶺にはめずらしい、えんえんとつらなるみごとな山脈であった。そのたいらなスカイ・ラインは、やっと森林限界に達しているようにみえた。われわれの立っている西にむいた山腹には、まだ日はさしてこないが、ジン山脈は、もういっばいに初夏の日をあびていた。われわれは、なんという上天氣にめぐまれたのだろう。あおぞらには、ひとかけの雲もない。ただ、ピストラヤの谷ぞこ、のこしてきたキャンプのあたりには、朝霧がまだ消えずに、しろいかたまりをなしてしずんでいた。

南にある前山の、まるい、たいらないただが、しだいにひくくなりだした。そのハイマツにうすめつくされた頂上にちらばっている地衣原が、ちょうど小さな禿げのおおい子どものあたまのようだ(図版二ページ下)。一方われわれのまわりでは、ハイマツの海と地衣原とのわりあい、しだいに逆轉しつつあった。ハイマツのしめる面積は、し

だいにせまくなり、ハイマツそのものも、しだいにたけがひくく、日本アルプスの尾根すじをおもわせるすがたとなってきた。地衣原にも、ハナゴケのたぐいがへって、イワタケや、まるで岩の地にしみこんだえのぐのような、チズゴケのたぐいがふえてきた。それにくわえるに、頂上ちかくのきびしい氣候のせいか、あるいは頂上だけ岩石の種類がちがうのか、礫原をつくる礫のおおきさが、めだってちいさくなり、いままでのしろっぽい色から、黒褐色へと変化して、あたりはにわかに荒れはてた感じをおびてきた。われわれは、ついに、さいごのハイマツのかたまりにたどりついた。

ひくく這ったハイマツのねもとに、やわらかなガンコウランのクッションをみつけて、さいごの休息をとった。みあげると、かなり急な礫の斜面が、まひるちかい太陽にてらされて、むらさきをおびてかがやいている。距離の目測はつかない。さいごの登りをまえにして、そのおおいかぶさるような斜面をながめるのが、たのしかった。しかし、いきおいこんで立ちあがったわれわれは、向い日のせいで、すっかり錯覚をおこしていたことを知った。というのは、無限につづいているようにみえた斜面は、あんがいみじかくて、まもなく傾斜がゆるまったな、とおもうまもなく、われわれは、いきおいこんで頂上になげだされていたのである。

じゅんすいの原始のにおいにみちた、ワイルドな頂上だった。せまい、三〇—四〇メートル平方のひろさに、黒い礫でできた平坦面があるだけだ。礫は、とりどりの地衣のまだらにそまっているが、一本の草すらない。そのまんなかに立ってみあげると、日本晴れの空のほかには、なにもみえなかった。まわり数十キロの半径のなかには、肩をならべるような山は、ひとつもないのだ。独立峯のただきだけがもっている、どくとくの快感だった。われわれは、せつせとケルンをつみ、たずさえてきたシラカンバの幹にゆわえつけた旗をたてた。つめたい西北のシベリア風に、旗はちぎれるように鳴った。風をさけて、頂上の南がわにでてみると、頂上のま下に、ひ

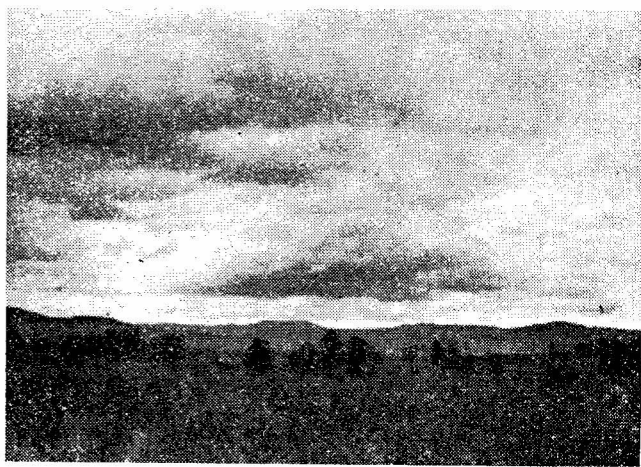


図 37. ビストラヤ最源流の谷。中央にこしかけ型の山がみえる。

馬は、ほとんど二キロも下流でみつかった。きっと、ひもじさに草をもとめて、下流へ下流へとさまよっていったものであろう。しかし、ぶじな馬のすがたをみつけたとき、ほっと安心すると同時に、おたがいの顔に、一抹

の落胆がみえたのは、喜劇というには、あまりにも皮肉な現実であった。もし馬が死んでいたら、涙ながらに腹いっぱい肉を食おうというのが、かねての申しあわせであったのだから。それほど、われわれは腹をすかせていた。基地までの予定日数二〇日にたいして、手もちの食糧は、二五日分しかなかった。しかも、食糧係りの土倉は、ひそかに万一をおもんばかって、毎日すこしずつ定量以下をみんなにふるまっていたのであった。オロチヨンもグラモースキーもない支隊には、肉もなければ魚もない。きょうもあすも、あさっても、乾燥キャベツばかりが、食膳にでてきた。こんなにしても、なお基地に到達できなかったら……。われわれの腹は、きまっていた。たとえ本隊や漠河隊にであうことができなくても、支隊は支隊だけで、三頭の馬をつぎつぎと食って、モーホまでゆきつくまでのことだ。

まだ、雨期には早いとおもわれるのに、いらだたしくも、よく雨がふった。この雨も、終日終夜ふりつづけ、ようやく一三日の朝に晴れあがった。一時間ののちには、はやくも分水嶺の峠に立っていた。水源からしばらく

急斜面をよじると、パッとひろい台地がひらけ、立ち枯れのカラマツを散在させていた。ビストラヤ本流の水源にあたるこの峠を、われわれは、「松枯れ峠」とよんだ。

高原の一角に、めずらしく、五メートルばかりも突出した、粗面玄武岩の露頭があった。そのうえに立ってながめた、満洲高原の中央部のパノラマは、まことにすばらしいかぎりであった(図版二—三ページ、上段)。空はところよく晴れていた。眼のとどくかぎり、ただ大波のつらなる大洋のように、なめらかな山々のうねりのうえには、不自然に突出する高山はひとつもなく、準平原だったころの大興安嶺のおもかげを、遺憾なくつたえていた。それだけに、いまよいよ白色地帯をまえにして、どこを目標としてよいかには、まよわざるをえなかつた。けれども、くわしく紫陽道人のスケッチをはじめてゆくと、この大海のような眺めのなかにも、ま北にあたって、いくぶんか高くぬきでて、鉢をふせたようなひとつの高峯が、かすかにとらえられたのはさいわいだ。これは、おそらく、のちに藤田によって登られた、南望山だったろうと思われる。

峠の高原には、みわたすかぎり累々と、枯れ死んだハイマツの老木の株が、よこたわっていて、あるきにくい。とおからぬ昔には、ここもまた、一めんに密生したハイマツのしげみだったことがわかる。いまそこには、谷の灌木濕地の代表者であるマメカンバが、一めんにかわいたイェルニクをつくっていた。ハイマツの第二世も、点々とそだちはじめてはいたが、もうここは、半永久的にイェルニクの占めるところとなりそうである。ちかくにある、かろうじて森林限界をぬいた程度の高みに、つきつぎと双眼鏡のレンズをむけてみると、いずれもカラマツ林から突如として、こうした平坦面の荒地地へとうつりかわっているのがみられた。あるいは、山火事のせいなのかもしれない。西のほうには、ほどとおからぬあたりに、ちょうど高原山をちいさくしたような、腰かけ型の峯がめだった(図37)。やはり、まるで木の切りかぶのように頂上が平らで、森林がなく、まったく平坦

面と不連続な、急な山腹によってかこまれているのである。ピストラヤの源流には、こうした頂きの平坦な山や、階段状の地形がすくなくない。もし植物のおおいをはがしてしまつたら、その感じは、あのコロラドやアリゾナの乾燥地形の卓状高原に、ややにかよつたものとなつたかもしれぬ。

松枯れ峠をこえた向うは、ピストラヤ中流に東からそそぐ大支流、ウェルフネ・ウルギーチの流域であろうとおもわれた。北に流れるうつくしい支流にはいると、北部大興安嶺の基盤をなす花崗岩類の一部とおぼしい閃長斑岩が、はじめて顔をだして、くる日もくる日も玄武岩ばかりの旅に、げっそりしていた藤田をよろこばせた。やがて、東から西に流れる大きな本流にぶつかった。河は、ものすごく増水していた。この見知らぬ世界でゆきあつた濁流は、河床いっぱいにみなぎりあふれて、威圧的であつた。とうてい渡れそうもない。連日の雨は凍土をとかして、いっそう増水をはなはだしくしたのであらう。あすは水もへるだらうかと心だのみにして、その夜のテントは、河べりの林内に張つた。

あくる朝は、水はかなりへつていた。しかし、それでも、水べで水をもうとした土倉は、かがんだはずみに足をすべらせて河におちこみ、あつというまに、六尺ゆたかの長身を頭までしずめてしまった。かろうじて岸べの草をつかんで、おぼれるのはまぬがれたが、このありさまでは、容易に河をこえられそうもなかつた。ちょうど、河辺林の大木が、水に根もとをあらわれてたおれ、いく本かの天然の丸木橋をかけていた。われわれは、あぶなかしい足どりでバランスをたもちながら、何度もそのうえを往復して、よちよちと荷物はこぼなければならなかつた。駄馬の積み荷をわたしおわると、フォーミンは下手に渡渉点をみつけ、ようやく馬を対岸にうつした。駄馬にふたたび荷をつけたのが一一時、ちょうど半日しごとだつた。

大興安嶺の地形の構造線は、およそ東西と南北との二方向に、格子のように走っているのが特色である。ピス

トラヤの流域にはいつては、とくにそれが痛感された。ピストラヤの流路そのものが、東西と南北との方向をか
 わるがわるとして、直角の大屈曲をくりかえしているのは、地図にあきらかである。したがって、われわれのル
 ートも、春峠・花峠でこえた山脈のような、東西方向の山脈の山ごえと、ナーラチ、ピストラヤ源流、松枯れ峠
 からここへの小谷、など、南北方向の谷あるきとのくりかえしであった。もちろん、そのあいだには、ピストラ
 ヤの諸支流や、ウェルフネ・ウルギーチのような、東西方向の河ごえが、はさまってきている。いまや、われわ
 れは、山ごえの段階にもどってきて、きょうからは、また峠ごえのくりかえしがはじまった。その第一が、ウル
 ギーチの右岸を東西にはしる山脈であった。

しかし、この山ごえは、苦もなかった。そこでは、期待した前途の展望がえられなかったかわりに、りっぱな
 オロチョン道をとらえた。この峠は、高度はひくいが、ハイマツが密生していたので、「ハイマツ峠」となづけ
 た。峠から北に流れる谷は、南がわよりもはるかに長かったから、われわれは、かなり海拔高度のひくい谷へと
 近づきつつあるように思われた。

この日の夕方には、ふたたび、東西に流れる大きな河にゆきあった。これは、のちに、ウェルフネ・ウルギー
 チと併行してピストラヤにそそぐ支流、マンクイ川の上流と確認された。この河には、カラマツにまじって、み
 ずみずしい廣葉樹がスクスクとのびて、河辺林をつくっていた(図版三ページ)。いじけたカラマツの世界ばかりを
 とおりぬけてきたあと、この河辺林の印象は強烈だった。ドロヤケシヨウヤナギ、ヤナギ類の木立ちは、ナーラ
 チらしい、しばらくみないあいだに、おおおともえていた。すばらしいシラカンバの新緑。ゆたかな河の流れ
 は、すこしにごつてはいるが、うつくしく林内をうねっている。河辺林は、うっそうと小暗くしげっているにも
 かかわらず、なんとあかるく、ゆたかに感ぜられたことだろう。日の光は、おお葉をとおして、水面にキラキラ

とおどった。かつてなかったほど、小鳥たちが数おおくさえずっていた。野地坊主の青草も、眼のさめるようにふさふさと、水べにのびしげっている。馬やフォーターミンでなくとも、だれもが夢中になったのもむりはない。

しかし、この河辺林を一步はなれると、谷間には、あいかわらず、ものさびた湿地と礫原とが、しずまりかえっているのである。大河の河辺林、そこは、興安嶺のなかで、ただひとつのいきいきとした、生命のざわめく世界である。河の流れは、かれらにめぐみをもたらし、またその瀬の音のざわめきを、かれらに感染させているのだろうか。(川喜田)

荒涼たる世界

ビストラヤ源流一帯を旅するものの印象を、ゆたかな海洋性の南國にすむ日本のひとびとに、正確に傳えることはむづかしい。じつはわれわれも、旅立ちのまえには、大興安嶺のもっともおくまったこの附近に、ちがった期待をいだいていたことはあらそえない。われわれは、そこに、黒々とつらなる樹海を予想していた。そして、人間のおいのほとんどない世界を。これは、決して事実とまったくちがっていたわけではない。しかし、印象そのものには、ひじょうなちがいがあった。

山好きぞろいのわれわれは、日本人里はなれた深山の森林を、よく知っている。北海道の石狩川源流の原始林——あの大島亮吉氏をよろこばせた森の、沈黙とはてしなさも知っている。冬のカラフトの、きびしい森の沈黙も知っている。それから、朝鮮や東滿洲の樹海の旅をも経験してきた。しかし、そこには、なにか底あたたかい、森の木々の生命力があった。幹には蔓がまとい、下生えもゆたかだった。谷川のながれは、嬉々としておど



図 33. 中央部山地の貧弱なカラマツ林。松枯れ峠ちかくにて。

り歌っていた。そこには、さわめく生命のひびきがただよっていたのであった。

しかし、大興安嶺の中心部では、なにもかもがちがっていた。ここは、荒れはてた沈黙の世界だった。見るものは、黒々とした森の茂りではなく、おなじ針葉樹でも、冬には落葉して墨絵のようにさびしい淡色をかもしだし、夏になろうとするいまでさえ、あさみどりの散漫な新緑を上げらせているにすぎない、カラマツのただ一色であった。ものみな灰いろにしずむ早春には、永遠に青春の樹かとおもわれる、シベリアアカマツの鮮緑のこすえと赤い幹も、まっ白な肌にみずみずしい新緑をそよがせる、陽気なシラカンバでさえも、ここではほとんどめだたない。松枯れ峠の附近では、アカマツもシラカンバも、森林の一パーセントをしめるかどうかもうたがわしいほどであった。

あった。立ち枯れの喬木は、いたるところに残骸を林立させて、あたりの風景を、いっそうものすさまじいものとしていた。生きのこりのカラマツたちも、若くしてはやくも老成した沈滞をしめし、のびのびと葉をのぼす青春

の楽しみを知らないようにみえた。その枝々には、老人のひげをおもわせる地衣類がまといついている。小さい流れのほとりの濕地にそだつカラマツも、密生した枝にっぱいの地衣をぶらさげ、せせこましくねじくられて、幹の纖維はらせん状を呈していることがよくあった。

すでに、ガン河の紀行中で、ミッドンドルフのことを引用して説明されているように、これらの木が、小さくとも若木を意味しないことは、いうまでもない。われわれが、のちに基地で伐採した数本のカラマツは、直径二〇センチ前後で、およそ一六〇年くらい、ちょうど大興安嶺では平均のそだちぶりであったが、これにくらべて、いまわれわれのまわりをとりまいてゐるカラマツは、一段と成長がわるかった。これから考えてみても、この大興安嶺の中心部の自然環境のきびしさは、想像にかたくないであろう。

山腹や、とりわけ條件にめぐまれない山頂附近では、カラマツは、散開したり、あるいは立ち枯れとなつて、一木もない荒れ地に位置をゆすっていた。こういう荒れ地の何割かは、林立している枯れ木からみて、山火事に原因するものと思われる。しかし、なおそれでは説明しきれない空き地が、いたるところにちらばっていた。樹木の成長のにぶさがしめず環境のきびしさは、わずかの悪條件によつても、カラマツ林の成立をおさえ、また山火事あとに森林の再生する力をよわめていたのである。こういう林空地を、東シベリアでは、ガリーリ (Gally) とよんでいる。東シベリア地方のタイガの北半部の特徴のひとつに、濕地におけるイェルニク存在とならんで、ガリーリのいちじるしい發達があげられているのは、われわれをうなずかせる。緯度を低く南方にあるけれども、ここは、東シベリアのタイガの北半部にそうとうする、きびしい氣候をもっているのであった。

このカラマツ林のおとろえにつけてこんで、勢力をふるっているのが、松枯れ峠の高原のうえでみたマメカンバの乾性イェルニクであった。ガリーリの大部分には、マメカンバが密生して、多少のムラサキツツジやコウアンハ

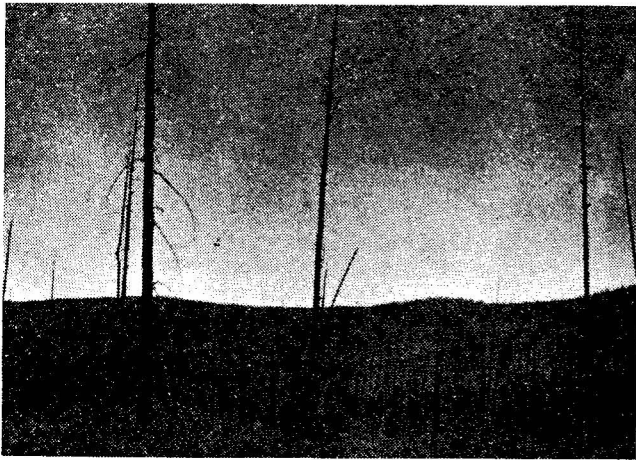


図 39. 山火事のあとにできた、マメカンバの乾性イエルニク（ニジネ・ウルギーチの水源）。

をおさえる氣候條件の悪さにひそんでいるのである。

一方、河谷にも、イエルニク濕原が、あいかわらず、單調な茂りを、くりひろげていた。さもなければ、岩屑

メカンバの株からは、さかんに若い枝がのびはじめていたから、山火事あとにであって観察してみると、焼けたマ
ンノキをまじえた灌木原をつくっていた。ときおりあたらしい山火事あとにであって観察してみると、焼けたマ
メカンバの株からは、さかんに若い枝がのびはじめていたから、山火事は、カラマツにたいするマメカンバの相
対的な勢力をつよめこそすれ、よわめることはない。プレチ
ュケは、このような高地のかわいたイエルニクは、大興安嶺
にはみられない、その点が、ほかの東シベリア地方とちがう
ところで、大興安嶺の山火事の害が、森林の原始性を破壊し
ていないというしょうこだと書いている。ところが、あには
からんや、中心部には、それは、ひじょうな勢力をふるって
いるのである。プレチュケのルートに近いピストラヤ本流を
あるいた本隊の経験では、中流附近では、たしかに、ガール
のイエルニクは、ひじょうにすくない。オロチョンの居住密
度、したがって山火事の頻度からいえば、本隊のルートは、
支隊のルートよりも、ずっと高いのだから、ガールと乾いた
イエルニクとの成因を、山火事だけでもとめるのは、この点
から考えても、まちがっている。山火事は、どこまでも誘因
にすぎないのであって、ほんとうの原因は、森林の再生拡大

のつみかさなつた礫原がひろがっている。この平坦な礫原は、たいらな河谷の濕地や、山すその疎林のあいだに、ところどころはげのようにまじっていた。そのなかには、地衣類さえもおおわれない、ガラガラした裸地さえみられた。

礫原——いままでにくりかえし描写してきた、はだかの角礫におおわれた土地を、こうよぶことにしよう——は、平坦な段丘のうえばかりでなく、しばしば山腹や尾根のうえにもあらわれるが、とりわけ山腹の斜面のものは、印象的であった。もっともふつうにみられるのは、南または西にむいた急斜面であった。谷をゆくわれわれの頭上に、おおいかぶさるようにつみかさなつた礫の堆積は、無言の圧力をもつてせまってくる。ただ、その表面が、岩屑の凹凸をおおいかくさんばかりにはびこつた、地衣のカーペットにいろどられておるとき、荒れはつた印象はいくらかやわらげられる（図版七ページ）。ピストラヤの源流には、草地やシラカンバの疎林となつたソルノピョークは、もはや見られないのである。

いくたびもその美しさをたたえてきたように、この地衣原こそは、この荒涼たる世界における、ただひとつの色どりであった。松枯れ峠から北に流れる支流の途中でも、この地衣原には、感嘆をくりかえさないわけにはゆかなかつた。東部カナダのタイガ・ゾーンの北半部にあらわれてくる地衣森林——ハナゴケのカーペットのうえに、まばらにエゾマツのはえた——を報告したヘーアが、それを、もっとも絵画的な色彩にとんだ風景とよび、色彩写真でさえそのおもかけをつたえることはできない、となげいているのに、われわれはまったく同感する。

ハナゴケの礫原には、かわいいらすのようなすがたのナキウサギが、穴からあらわれて、チチーッとなくことがある。それは、鳥の声も、風の音さえもすくない、この死のような世界で、われわれの眼にふれた、たったひとつの獣であつた。

ふくざつな、変化ある自然にならされた、南の島國の人間にとっては、この中央部の自然に端的にあらわれた、大興安嶺の單調さ——変化のなさは、それ自体があたらしい経験であった。わずか二ヵ月の旅にすぎなかったとはいえ、正直のところ、それは、じつに長い二ヵ月だった。くる日もくる日も、それはカラマツの林の旅だった。くる日もくる日も濕地わたりだった。駄馬への心づかいと、データの整理と、四日に一度の滞在日へのたのしみとであった。さすがの今西隊長でさえ、旅のおわりにちかづいたある日、「もう興安嶺にはたんのうした」と、腹のそこらもらしたのであった。

このささやかな探検の経験をへたいまでは、大陸國民であるロシア人たちの、ものの考えかたや感じかたなどを、いくらかは理解できるようになった気がする。また、北極の旅からかえったナンセンが、いいあらわしがたしい沈うつな、深刻な、陰險ですらある想念に、ながいあいだとりつかれたという話も、なにかしらよく理解できるような気がする。この單調のなかでは、人のおもいは、なんとなく深刻に、また陰險になってゆくようだ。一本の大木が、じわじわと大地の暗黒のなかに、ふかく根をひろげてゆくかのように。軽快な南國の性格はうせて、そのかわりに、なにか偉大さに通じる教訓が、あたえられるかのようにだ。北極からかえったナンセンにとつて、文明世界のなにやかやは、軽薄な根のあさいものとして感ぜられた。かれは、暗黒の夜の星をみつめて、じぶんは、神の鎖をひきちぎって天空をあらしまわるといふ、あの巨人なのであろうか、と日記にしている。それは、ごう慢ではなくて、沈うつななかからうまれて、あくまでも無限にむかいていどまざるをえない、デモ―ニッシュな魂のうめきごえだったのであろう。(川喜田・吉良)

〔註〕

- ① ミロツウォルツェフ・滿鉄經濟調査会訳(一九三六)前出、一六五ページ。ガ―リは、かわいたものばかりでなく、往々

として沼沢化し、イエルニクにより占められるという。

② Plaetschke (1937) op. cit. S. 79-80.

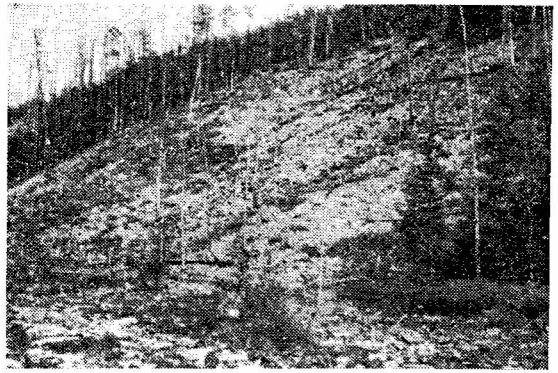
③ Hare (1950) *Climate and zonal divisions of the boreal forest formation in eastern Canada*. *Geogr. Rev.* 40 (4): 615-635.

④ ナキウサギについては、三四二—三、三四六—七ページをみよ。

礫原と岩屑被覆

礫原の存在については、もうすこしくわしく述べておく必要がある。これは、この荒涼とした世界の自然の、最大の特色のひとつだったからである。

礫原は、ガン河の水源らしい、とくに英吉里山をこえてビストラヤの流域にふみこんでから、ほとんどモーホまぢかにいたるまで、毎日のように眼にとまった。その存在は、とくに中央部ではいちじるしい。それは、あるいは山頂の平坦面に、あるいは急斜面に、あるいは段丘や階段状地形の平坦面に、そしてまた、河谷の平坦面にもみられた。その大きさは、せまいものは三メートル四方くらいから、一〇〇メートル四方にもおよぶが、ふつうは、直径二〇—三〇メートルくらいであろう。なかならず印象的なのは、イエルニクやカラマツ林でうすまった、谷の平坦地のなかに、ところどころ、はげのように散在している光景であった(図40C)。また、まえにのべた、南ないし西むきの急斜面に、一めんにひろがっている礫原の風景も、また、きわめて圧倒的である。このような礫の急斜面——二度に達するものが見られた——は、横にはかなり長くつづくことがあるが、垂直には、たいして比高二〇—三〇メートルくらいでおわっている。その面はほとんど幾何学的な平面をえがいて下向し、



A



B



C

図 40. 礫原の諸相. A(ソルノビョークの急斜面).
B(ゆるやかな斜面). C(谷の平地).

その下端では、水平にちかい谷や段丘の面と、不連続にまじわり、ほとんど崖錐状の連続をみせないのが、ふしぎな感じをあたえた(図40A)。

礫は、角礫ないし亜角礫で、大きさは、ひとつの礫原については、ほぼそろっていた。ひろく立武岩におおわれているビストラヤ源流では、この礫はわりあい小さくて、こぶし大から、径二〇センチ前後であったが、北部の花崗岩や花崗片麻岩の地帯では、一メートルにおよぶものもすくなくはなく、最大三メートルに達するもの

もみられた(図版七ページ上段)。望み山の前山のような、突出した山頂が、こんな巨礫におおわれている場合は、まるで、火山の噴火口ちかくにみられる礫地に似た印象をあたえた。

礫原の表面は、ハナゴケ類やエイランタイのような地衣におおわれていることがおおいが、灌木のまじることもあり、立ち枯れないし生きたままのカラマツが、まばらに生えているのをみることもあった。礫そのものの面は、まったく平らなこともあれば、起伏のある場合もある。基地附近以北での観察では、起伏の隆起部の大きさと形とは不定で、楯を伏せたようにまるいものもあれば、やや長くうね状をなすものもある。くぼみのほうも、同様に、溝状のものと、まるい孔状で、そのなから礫を四方になげだしたようなかたちのものがある。ふくらみやくぼみは、たいてい直径数メートル以内で、上下の高低差も一―二メートルをこえない。こういう礫原の表面のくぼみには、底にたまり水のみえることもあり、一見乾燥そのもののようにみえるが、あんがい地下水位の高いことをおもわせた。また、谷の平面にある礫原は、河からの距離をとわず、いたるところに、濕地にとりまかれ、水をたたえた土地となりあわせにさえ、存在するのである。

礫は、礫原として露出している部分にかぎって、存在しているわけではなかった。本隊がガン河とヤンギール川との合流点をあとにした五月二四日、川喜田は、河谷の濕地につづく丘の平坦地で、土壌をしらべるために、カラマツ林のふちを掘って、はじめて地下の岩屑の層にであった。コケモモの被覆のしたには、八センチばかりの厚さに、褐色の粘質壤土層があり、その下には、まったく突然に、ほとんど充填物をもたない、玄武岩の亞角礫が、果々とすがたをあらわしたのである。また、紫陽道人のためにのぼる丘の、ソルノビョークの斜面の上端には、きまって、角礫の堆積のあらわれることを、われわれは、ガン河の森林ステップいらい、たびたび注意してきた。ビストラヤの流域にはいってからは、林内のヒースのうえをゆく足うらに、下にひそんだかたい角礫を

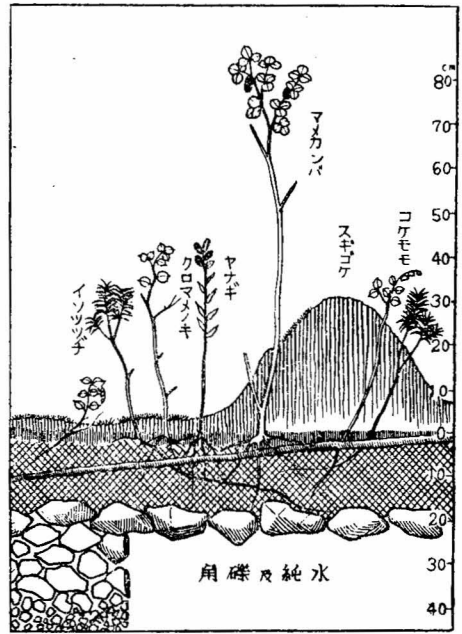


図 41. 基地における礫原の断面。地下20 cm までは、分解していない有機物の層である。

うな岩屑でおおわれており、たまたまそれが地表にあらわれている部分が、礫原としてみとめられるのである。とう、という推定に達した。この岩屑被覆をまぬがれているのは、ガン、ビストラヤ、アルベジハのような大河の谷に、ひろい沖積原が発達している部分にかぎられているようだ。こういう大河の岸には、円礫をまじえた沖積層の断面があらわれていて、これだけは、まちがいなく現在の河水による生成物だとわかった。けれども、このような沖積原につづく平坦面にさえ、山すそちかくなると、角礫原をみるのがあった。

この礫層の地下への延長を知ることが、凍結と労力との関係で、ひじょうに困難であった。ここには、のちに基地以北の二―三の地点で、すこしの深さを掘ってみた例をあげてみよう。その結果は、かなり奇妙な現象をあらわしている。図41はそのひとつで、基地のそばの、段丘面とも河谷底ともつかぬ、ゆるやかな斜面の、カラマ

感じたこともおおかった。また、根こそぎにたおれたカラマツの根系の下には、きまって岩屑の層が顔をだしていた。カラマツの林は、岩屑のうえにうすく発達した定積土に根をはって、生活しているように思われたのである。

こうした数おおくの例から、われわれは、北部大興安嶺山地の一帶―すくなくともその中心部一帯は、山頂・山腹・段丘・河谷をとわず、いたるところこのよ

ツ林内を掘ったものである。地表には、コケモモやイツツジがまばらにはえていたが、なかんずくスギコケが、あちこちに、二〇—三〇センチの高さの、奇妙な隆起をつくっていた。これは、地下から、過剰の水分がつねに供給される場所を、しめしているようだった。これらの植物被覆をはがし、ついで、根や地下莖や未分解の有機物が、マット状になったものをとりのけると、ほとんど土らしいものはなく、いきなり角礫があらわれてきた。角礫は、青氷でかく凍りついていた。あくる日には、ふかくまで凍結がとけたらしく、掘っても掘っても水がわいて、深くの状態をたしかめることはできなかった。けれども、角礫は、四〇センチの深さまで、むしろしだいに小型になっていった。角礫には、噴出岩である石英粗面岩と、基盤岩である花崗岩類とが、まじりあっていた。そして、五〇センチの深さになると、まっ黒でねばりのある、ドロドロの細粒物質からなる層の存在がうかがわれたのである。

さらに基地からモーホへの途中、モトカシとモンドリとのふたつの谷の合流点のキャンプ地でも、やはり似た現象をみとめた。ここは、東にソルノビョークの急斜面をひかえ、流れに近い平坦地で、山脚から五〇メートルばかりはなれたカラマツの疎林であった。地面はよくかわいて、コケモモとイツツジとがおおっており、やはりその被覆のすぐ下に礫層があった。表面の礫は、径一〇—三〇センチのおおきな亜角礫であったが、下層ほどしだいに小型となり、一—三センチ程度にまで小さくなった。礫層は、五五センチくらいの深さで、その下には、あらい砂をまじえた鮮黄色の粘土層があり、すくなくとも七〇センチの深さまでつづいていた。地下水面は、深さ四五センチ、角礫層の底部にちかいあたりにあった。

これらのわずかな例では、角礫層は、母岩のうえにじかにはのっていないで、粘土ないし泥土層のうえにあることと、礫の大きさが下ほど小さい逆配列となまっていることが、注意される。

この岩屑被覆と礫原との成因については、いずれ学術篇で論ぜられるが、ここでは、行程の途中でわれわれをなやませた疑問について、もうすこしつけくわえておこう。まず、谷の平坦地や段丘のうえに、ひろく分布している礫は、その地形とのむすびつきから、一見したところ、上流から運ばれてきたもののようにおもわれた。しかし、このように大きな礫が、ひじょうに傾斜のゆるい大興安嶺の谷にそうて、かくも大量に上流からはこぼれてくるためには、おそらく何度かのノアの洪水を仮定しなくてはならないだろう。夏に雨の集中してふる、この地方の氣候では、何十年に一度か、大洪水のおこる可能性はおおい。だがそれにしては、礫の分布があまりにもひろく一様であるし、第一、礫の円磨作用があまりにもすすんでいない。その全般的な性状は、山腹や斜面にある礫と、ひじょうによくにているのである。また、水成層にしては、礫と礫とのあいだをうすめている土砂のたぐいが、まったく欠けているのも、ふにおちない。もっとも、ときには、亜角礫という程度にまで、かどのとれている場合もあったから、しいて水成層とみなそうとする考えもおこりうるが、すべての場合にはあてはまらな

い。

では、この角礫は、谷の側面をなす山腹から、轉落したものでしょうか。とすれば、例のソルノピョーク地形をおおう、礫の急斜面などは、その供給源でなければならぬ。ところが、まえに注意しておいたように、この礫の斜面は、平坦面と不連続にまじわっていて、礫の轉落をものがたるような崖錐を發達させていない。そのうえ山脚からときには数百メートルもはなれたところにある礫原まで、礫のころがってくる可能性は、まずぜったいがないであろう。こう考えてみると、ただひとつの解釈として、これらの礫は、いまある位置で、母岩から風化して生じたものだ、という推定に達する。山頂や山腹の礫については、もちろん、これ以外の解釈はむずかしいであろう。

たしかに、この地方の氣候は、このようなはげしい機械的風化をおこすのに、つごうのよいものであることは、あらそえない。北部大興安嶺は、東シベリア地方一帯とともに、世界でもっとも大陸性のつよい氣候の土地である。たとえば、アムールの対岸にあるジャーリンダのハイサーグラフは、図42に示めすとおりで、じつに氣温の年較差が四五度におよぶ。年較差ばかりでなく、日較差もまたいちじるしいことは、われわれの観測によっても、あきらかであった。とくに岩石の露出しているようなところでは、晝夜の氣温の差は極端であるらしく、礫原のうえにほとんど地衣類しか生えることのできないおもな原因は、ここにあるらしかった。この地方によくいた氣候条件をもつ、ゼーヤ河上流のある夏の記録は、つぎのようにのべている。

「南部斜面における高温は、ところによっては露出し、ところによっては薄層の土壤におおわれている、花崗岩および片麻岩の熾烈な風化作用をおこさしめるのであって、もし強雨のあと焼くがとき日光に照射せられれば、音をたてて、岩石は亀裂し、斜面から大きなかたまりをなして、河岸に轉落する。かくのごとき現象は夏季中、再三ならずみとめた。」

本隊のとつたピストラヤの中流でも、流れが山すそにせまうって、崖をあらいだしているところには、かならず大量の角礫が崖錐をつくり、ゆるい礫の堆積状態からおして、きわめて活潑な礫の生成がおこりつつあることをしめしていた。一方、冬にもまた、凍結による岩石の崩壊がおこる。おなじくゼーヤ河上流の記録は、

「……冬季しばしばマイナス四〇度にも達する強寒に際し

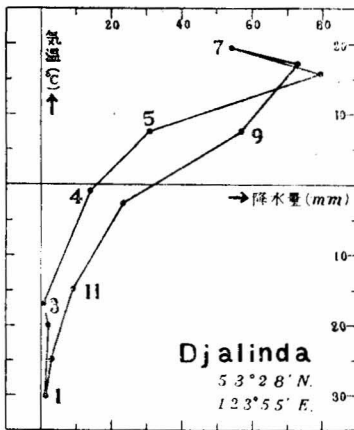


図 42. ジャーリンダのハイサーグラフ。

ては、岩石の巨塊が崩壊し、轟音とともに、あるいは谷地、あるいは小川およびゼーヤ河の氷上、あるいは河岸に落下し、後者においては、時として巨礫をなすことがある。」^②

岸に落下し、後者においては、時として巨礫をなすことがある。」^② とするしている。東シベリアの地誌類には、このゼーヤ河上流地方にかぎらず、ひろくヤクティーアやザバイカルの山地に、いろいろな存在様式をとって、角礫層がひろく分布することを記載していて、大陸性気候とのむすびつきを暗示している。

けれども、これで問題は解決したわけでは決してない。たとえば、母岩の風化により生じた礫が、そのままの位置にとどまっているものとすれば、礫層の構成は、下部ほど礫の大きくなる順配列をしめして、母岩に接しているはずであるが、さきほどの断面の例は、かえって逆配列をあらわし、その下に泥土層をもっていたではないか。われわれは、礫ができたのち、なんらかの力によって、再配列がおこなわれたと仮定すべきなのであろうか。また、いちじるしく地下温度の較差をすくなくする植物被覆——とくに森林の下にも、まんべんなく礫層の存在する事実を、どう説明すればよいだろうか。あるいは、過去の地質時代に、もったきびしい気候をもち、もっと植物被覆の貧弱であった時代の存在を、かんがえなければならぬのであろうか。

〔註〕

① プローホロフ・滿鉄調査課訳（一九二七）黒龍州の氣候・土壤・植物研究誌、上卷（大阪）四二ページ。原著発行一九一三年。

② プローホロフ（一九二七）前出、上卷、一五二ページ。

永久凍土のいぶき

ガン河いらいわれわれの注意をひいてきた永久凍土の問題は、中央部の山地にふみこむにつれて、いっそう身ぢかなものとなってきた。地下にかくれた凍土層のいぶきは、いたるところで感ぜられてきた。

地下の不透水層とむすびついていると考えられる湿地のはびこりかたは、眼にあまるものがあつた。ナラチの右岸では、湿地はとうとう大興安嶺の分水嶺上をさえしめていたのである。そのほか、地下の不透水層を予想させるあさい地下水位は、湿地以外でも、しばしば観察された。まえの節でみた例のように、礫原の下でさえ、意外にあさいところに地下水面のみられることがある。

われわれは、また、風のひじょうにすくないと考えられているこの山中で、しかも地すべりなどの可能性のない平地にはえた森林のなかの喬木が、ときおりかたむいて立っているのをみつけた(図43)。カラマツのあるものは、ややかたむいた不安定なかたちのまま生育し、あるものは一度かたむいてから、幹の上半部を逆にまけて、つりあいをもっていた。こういった根もとをみると、青い氷が株のすきまから見られることがおおかつた。このようなカラマツの株のすきまの氷が、さいごに観察



図 43. かたむいて立つカラマツ。

されたのは、われわれの旅のおわる直前、七月一日チーリング西方の林のなかであった。また、株の根もとだけが、ちいさな塚のかたちをなして、礫や土がもりあがっているのもみられた。これは、まえにのべたような（二一九ページ）冬の地下噴出が、樹木の根の下をえらんでおこった結果ともおもわれるが、これだけでは、はっきりしたことは断言できない。

また、ある倒木は、根こそぎたおれて直立した根の盤の最上部に、不安定な状態で、直径四〇センチばかりの石くれをのせていた。根はそれほど腐ってもいず、石くれにからみついてもいなかった。この根がもちあげられたとき、この石くれは、重力にさからうことのできるほど強く、根に膠着していたにちがいない。想像をたくましくするならば、この強い膠着力の原因は、凍結以外にはないだろう。そして、この木が冬の凍結下でたおれたものとすれば、それは絶対に風のためではないはずだ。なぜなら、この地域の冬は、世界でも有名な、死のような静けさにつつまれているのであり、そのうえ、地面はかたく凍りついているからである。ここにも、地下噴出を暗示する、ひとつの事実がある。

凍結が、こんなにも大興安嶺をつつんでいるのにひきかえ、積雪のほうは、まことに貧弱だった。五月の二二日と三〇日とにみまわれた雪は、あくる日にはすぐ消えてしまった。雪は、とけるというよりは、かわいた空気のかなかに昇華してしまふようだ。たぶんこの地方では、ま冬の雪そのものが、おなじような性質をしめすのである。われわれのたずさえていった航空写真は、ま冬の撮影で、雪景色なのであるが、森林の木々はもちろんのこと、野地坊主さえひとつひとつ区別できたから、積雪量は、ごくすくないにちがいない。アムール地方のゼーヤ河の支流ウルカン河の流域でも、われわれは、こういう記述にぶつかる。「一〇月一七日の初雪は、数日ののちには消え、完全に残ったのは、ようやく一月初旬であるが、それすら冬季六一九センチの間を増減し、二月

に入ってもまもなく融解しはじめ、同月末には耕地上ではまったく消失した。^①二月という月の低温を考えるなら、これは、にぎやかな川水に化けたのではなくて、空にまいあがって失せたのである。こういう冬の氣象條件こそ、寒さを地中ふかくしみとおらせるのに、あつらえむきの状態なのである。

それにもかかわらず、数ヶ所で、残雪やうのものがみられたのは、興味がふかい。ナプタルダイ(五月二六日)と、望山・高原山(六月七日)とにみられた、森林限界上の残雪はしばらくおくとして、もっと低い土地にも、残雪とも氷ともつかぬものが観察されている。その第一は、五月二五日、第九キャンプちかくのガン河の分流と、六月三日支隊の第一夜をおくった小谷の流れぞいにみられたものである。流れの岸にかたくこおりついて、水面よりややたかく、白い氷雪がのこっていたのである。おそらくこの氷雪は、シベリアの紀行によくでてくるターリン(Tarlin)の小さな例であらう。冬のはじめ、一度川の面に氷が張ったのち、下を流れる水は、氷の弱いところをつきやぶって、氷面にあふれ、ふたたび凍りつく。河はばのせばまったところや、流れの急な曲りかどなどでは、これがなんどもくりかえされ、雪をもまじえて、雪田とも氷田ともつかぬものを、厚くつくりあげてしまう。夏になっても、そこには雪田がのこって、まっ白くひややかにかがやいている。こういう場所をターリンとよんでいるのである。冬のターリンの風景は、まことにすざまじいものであるらしい。あたたかい河水からたちのぼる水蒸気は、たちまち凝結してもうもうと霧をまきあげ、やがて、霧はこまかい雪片となっておちてくる。ターリンの一带は、霧と雪とにとざされて、前をゆくそりのすがたもみえぬ。ひとびとは、マイナス数十度の寒さのなかを、氷のうえにあふれた水に、ときには腰までぬらしながら、そり犬をはげまして通りぬけるのである。^②

ドラガチェンカの東南にある泉のほとりでみた雪田、英吉里山の北がわの谷で、豆礫原のうえに残っていた、



図 44. モンドリの谷のナレチ (6月上旬).

ねこのひたいほどの雪のかたまり、それから、漠河隊がチーリンジの一日行程北にあるモンドリの谷でみた大規模の雪田などは、第二のグループにぞくする。この最後のものは、とくに注目にあたしよう(図44)。そこは、ゆるやかな河谷の平坦面で、流れは西のほうをささやかに流れ、東北にはゆるやかなカラマツ林の丘があって、高さ五メートルたらずの段丘状の斜面を境として、谷の平坦面に接していた。雪田は、一五〇——三〇〇メートルのだえん形で、段丘斜面の下から西南につづく、たいらな微傾斜地を始めていた。雪の厚さは五〇センチをこえ、かたくしまったザラメ雪であった。そして、雪田のうえには、山すその低い台地の基部からわきでた地下水が、雪面にみぞをえぐって流れていた。かえり道の七月一三日には、雪はまったく消え、雪田のあとの大部分は、はだかの礫原と、ところどころそれをおおうイェルニクとなっていた。水流は影もなく、やや低いところに

さしわたし一〇メートルくらいの浅い沼ができていた。雪が、この地点にだけひろく厚くのこっていたのは、

単に冬の残雪としてはかたづけられない。原因は、おそ

表 6. 降雨と凍土の融解との関係.

1909年 月 日	1 日平均 降水量 mm	1 日平均凍土 融解量 cm
6. 8.—6.16.	0.77	0.25
6.16.—6.19.	12.00	0.83
6.19.—7. 2.	1.26	0.20
7. 2.—7. 9.	11.10	2.00
7. 9.—7.23.	0.52	0.43
7.23.—7.28.	16.84	2.80
7.28.—8. 4.	0.00	0.30
8. 4.—8.15.	7.27	1.64
8.15.—8.21.	0.00	9.70

らく地下水にあるのであろう。さきの地下噴出の場合とおなじように、下の永久凍結面と上から凍ってきた活動層とはさまれた地下水が、高圧のためになかなか凍らず、地表をやぶってしみだしてくる現象は、シベリアではナレーヂ (naleydy) とよばれる。そして、ターリンの場合とおなじように、水は昇華して雪となり、あたり一めんにもふりつもって、雪田となるのである。ドラガチェンカの雪田では、泉のわき口のほとりの土が、草の根といっしょにおしあげられて、うすたかくもりあがり、地下からの圧力をしめしていた(図4)。たぶん、この三つの例は、大小さまざまのナレーヂをあらわしているものであろう。そして、ナレーヂと礫原とがむすびついていることは、とくに興味をおぼえさせる。

永久凍土層のいぶきは、また、おもいがけない障害をももたらした。まえの節でみたように、ピストラヤの最源流で雨の一夜をすごしたわれわれは、つぎにむかえたウエルフネ・ウルギーチの本流で、雨量には不にいな、おそろしい増水にぶつかつた。おなじような経験は、ガン河の峡谷部でも、ピストラヤの本流でも、しきりと本隊をなやましたのである。のちになつて知つたのであるが、この増水は、雨によつて凍土の融解のはやめられるのにもとづくらしい。アムール地方ゼーヤ河流域のウランガで観測された表6の数字は、降雨がいかにすみやかに凍土をとかしてゆかかをものがたつてゐる^①。ガン河上流では、まだ足にかたい凍結面を感じさせて、わりあい歩きやすかつた野地坊主濕地が、六月五日の雨のあと、はるかに歩きにくくなつてしまつたのも、おなじ理由によるものであろう。

もちろん、凍土のとける根本原因が、気温の上昇にあることはまちがいない。しかし、地表に植物被覆——とくにミズゴケやスギゴケの層のある場合には、晴天の日の日射と高い気温も、ただそのごく表面だけを、つよくあたためるにすぎない。かつてカラフトのポロナイ河ぞいのツンドラ泥炭が、ツンドライトの名のもとに、圧縮して断熱用材料としてもちいられたのでもわかるように、ミズゴケや泥炭の層は、ひじょうに断熱性にとんでいゝる。しかし、雨がふれば、表層の温度は下るかわり、雨水はその熱をとらえて、下層にはこび、凍結をとかしてゆくのである。(以上二節 川喜田・藤田)

〔註〕

- ① プローホロフ(一九二七)前出、下巻、一七八ページ。
- ② この描写は、ゲルコという旅行家のかいた。Wyna: adventures in eastern Siberia という本からとった。原本が手もとにないので、引用した場所をあきらかにすることはできない。
- ③ プローホロフ(一九二七)前出、下巻、一〇六ページ。

白 色 地 帯

ここで、ふたたび、もとのマンクイ川のキャンプに、話をもどそう。このうつくしい河べりのやどりをさいごに、六月一五日から、支隊は、いよいよ白色地帯にふみこむこととなった。わずか五〇キロそこそこの行程とはいえ、航空写真のたすけをはなれて、天測と推測航法と紫陽道人とをたよりに、目標のない大洋にた世界にふみこむのは、やはり不安とあたらしい緊張とをともなう出発であった。天測は、ガン河らしい、毎日のようにつ

づけられて、五〇万分の一の地図上には、そこに印刷されたでたらめの山や河を痛快に無視して、天測点をつらねた細い線が、北へ北へのびつつあった。天測結果の精度は、かなり優秀なようにおもわれた。とくに方法の性質上、緯度の誤差が経度のそれにくらべて、格段に小さいことは、北にむかってすすむわれわれにとって有利であった。こういう探検用の天測法の手引きなどをしてくれる人のまったくいない内地で、数冊の基礎的な参考書をたよりに、どくとくの方法をくふうし、観測野帳までつくりあげた、半年の藤田の苦心は、むくいられつつあった。のちに、経緯度のわかった基地での観測の結果は、緯度の誤差一キロ以内、経度でも二―三キロをこえることはないことを確認させた。

大塚さん手製の短波ラジオは、よい性能で、毎日時報をキャッチしていた。ポケット・コンパスと歩度計とは、われわれのあゆみを、折れまがった線のつらなりとして記録してゆく。ひとつの天測点から出発して、つぎの天測点までのあいだをつなぐ、この折線は、つぎの天測に必要な、推定経緯度をあたえる。これが推測航法 (dead reckoning) とよばれる行進法なのである。藤田の手でえがきだされてゆくこの骨格線に、周囲の地形のスケッチ・マップの肉をきせてゆくのは、梅棹のしごとである。器用なかれは、白色地帯にはいるころには、測量隊のくろうとはだしの、きれいなルート・マップを、手ぎわよくかきあげるようになっていた。ここまでの一〇日あまりの旅のあいだのトレーニングで、なにもかもが、スムーズに、まちがいなくはこぶようになったころ、うましく白色地帯がやってきたわけだ。毎日テントをはったのち、第一のしごとのひとつは、ラジオのアンテナをはることだったが、それでさえ、いまや熟練の域にまで達していた。藤田が、アンテナの一端に石ころをむすびつけ、エイとひとこえ投げあげると、みごとにねらった木の枝にからみつく。そのたびに、われわれは、かれのじまをきかなくてはならないのであった。

マングイ川の北を、流れと併行にはしる東西の山脈の山ごえは、意外に手ごわかった。マングイの谷がひくかっただけに、登りはながく、しかもけわしかった。われわれ人間は、ジグザクにのぼることもできるが、駄馬とては、まっすぐにのぼるほかに途をしないのだ。しかも、やっと登りをきりぬけたと思ったら、こんどは、急傾斜の下りにくわえて、ものすごいハイマツの密生がまうちうけていた。駄馬が、なんとかこれを通りぬけることができたのは、いま考えてみてもふしぎなくらいだ。フォーミンの、すぐれた馬あつかいの技術と、見かけはみすばらしいコサック馬の、おそろしい頑丈さとねばりと、これが、われわれの成功の最大の原因であった。ドラガチエンカの獣医から、「おそろべき駄馬ぞろい」とおりがみをつけられたコサック馬の、眞面目はこんなものだったのである。

峠のうえからは、理想的な白色地帯の展望がえられた。いかにも白色地帯という名にふさわしい、つかまえてころのないながめだった。特徴のない、わずかな尾根ひだが、かさなりあって錯綜した一大高原地帯が、あすの行程に予想された。見しらぬ川の源流地に、たそがれをむかえたわれわれは、紫陽道人の結果から、めいめい各人各様の想像図をえがいた。

快晴のあさ、シラカンベの疎林をぬうて、まずひくい峠のいただきに立った。はたして、その向うには、ひろびろとした高原状の盆地がひらけた。東には、すっきりとしたすがたの、かなりの高峯が、ゆったりとそびえ、はげあがったその山火事あとの斜面には、ハイマツが、公園のようなたたずまいをみせて、点在していた。この山の西のふもとをめぐる高原盆地には、一めんの樹海がしずまりかえていた。この平坦地のつきるかなたには、おそろく、それとはわからぬくらの、ひくい分水点があるだろう。そして、その分水点をこえた北には、おそろく、ビストラヤの大支流ニジネ・ウルギーチか、ひょっとすると大興安嶺の東斜面の大河クマラかの流域

がよこたわっているだろう。方針はきまっていた。その分水嶺にむかって、まっすぐ北へ、樹海をつきぬけよう。

大興安嶺のどこへいっても、ひくいところにあつて、濕地化していない土地はない。ところが、この盆地をうすめる森だけは、めずらしく、ほとんど濕地らしい濕地をみせることなく、四キロばかりも坦々とつづいた。意外なところから川があらわれ、またどこかへ去っていった。われわれは、この川が、比較的わかわかしいのをみとめた。兩岸に、わりあいにかどのとれた礫を堆積しながら、早瀬をなして流れている。こんな流れは、いままでの道すじには、めずらしかった。そのうえ、水は透明にすんでいた。ゆうべのキャンプ地の流れもそうだった。水質は、どうやら、母岩に関係しているようにも思われた。水べには、しろい花崗岩の礫が、眼をひいた。白色地帯にはいるすこしまえから、われわれは、ようやくはてしのない玄武岩台地をはなれて、深成岩のひろく露出する地帯へと、さしかかってくるのである。

森がおわつて、みわたすかぎり立ち枯れの樹木と礫原とのいりまじった、うちひらけた水源地帯があらわれた。そのあたりに分水点を予想していたあてはずれた。そこには、どこにも、分水点らしい鞍部はなかった。われわれは、とあるちいさな丘にのぼつて、展望をこころみだ。まったく、狐につままれた思いで。

初夏の暑い日ざしが、礫原のうえに照りかえしていた。この、えたいの知れぬ高原のなかにほうりだされて、われわれは、不安こそあれ、おじげづくようなことはなかった。

「これはおもしろうなってきたわい。猛然とはりきってきたぞ。」

と梅棹がつぶやいていた。その記憶は、いまでも、わたくしたちの心にあざやかである。不安と、それをのりこえようとする猛然とした闘志とにゆりうごかされながら、われわれは、かえつてゆっくりと、この丘のうえの休息をたのしんだ。

背後の盆地につづくこの源流地帯は、あたかもおおきな手のひらをひろげたように、いくつもの谷をあつめ、われわれにむかって、ひとつの雄大な半田劇場をかたちづくっていた。どの谷も、みわたすかぎりの山火事あとだった。午後の太陽が、強烈な光りで、あざやかに、この白色地帯の谷々丘々をつつんでいた。

「あの谷をのぼって、北へのりこえよう。」

すでにかたむいた日ざしのなかを、われわれは、あるきつづけた。いつのまにか源流の谷はきえうせて、大斜面にでていた。ヒースとマメカンベとの原が、どこまでもつづいた。予想に反して、このゆるやかな大斜面は、盡きそうに盡きず、ひろがりにひろがったすえ、立ち枯れの散在する、茫々とした台地へと、われわれをみちびいていった（図版五ページ、上段）。

のどのかわきになやむわれわれのまえに、ついに、夕陽をあびた北方のながめがひらけた。この台地が、いよいよ峠だったのだ。そして、松枯れ峠いらい、ま北にあたって目標となっていた、ドーム型の峯が、もうよほど近く、そのすがたをあらわしてきた。高原の峠の向うには、南東から北西へと、われわれのルートとしてふさわしい方向をもった、ひとつの谷が、みおろされた。

われわれが、そこに予想していたのは、ニジネ・ウルギーチの上流だった。ピストラヤの本流が、北から南西へと急角度に屈曲する地点で、北東からそそぐこの大支流は、ちょうど基地のすぐ南方で、うつくしい弧をえがいて、南東に流れの方向をかえている。そして、ちょうどそこで白色地帯がはじまり、はたしてその上流がどこまでのびているのかはわからない。もし、この川の上流をつかまえることに成功したら、あと基地への道は、もう問題にならない。はたして、この足もとの谷は、ニジネ・ウルギーチなのだろうか。すくなくとも、谷の方向だけは、うまく註文にあっている。けれども、もうひとつの可能性がまだのこっていた。それは、東に流れるク

マラ河の上流が、ふかく西にのびて、ここまで達している可能性である。もしこの谷が、クマラの上流の一部であったら、われわれは、まだ容易にはこの迷路から解放されないことになるだろう。このふたつの可能性の、どちらが実現するかは、一にかかって、この足もとの谷が、北西へと流れているか、南東へ流れているかを確かめることにあった。

だが、われわれは、はやる心をおさえて、谷の本流まではおりずに、この高原の一角にテントをはることにした。あすは、しばらくぶりの滞在日はすだった。夜ふけるまでおきて、太陽のかわりに北極星で天測をやるうというところみは、不成功におわった。夏至に近い北國の夏の夜は、とっぷり暮れるまでには、夜半までまたなければならなかったからである。空にむかってひらけた高原上の礫原の夜は、おそろしく冷えこんだ。このキャンプの第二夜、一七日の二二時には四度を記録した。

青天井の滞在日には、あかるい気分が支配していた。どうやら、足もとの谷は、ニジネ・ウルギーチらしくおもわれたからだ。とぐろをまいてなまけこんでいる連中をしり目に、土倉だけは、ほかにはしゃいで、はりきっていた。三人のおちつきはらっているのに、しびれをきらしたかれは、とうとうじれったそうに、馬にまたがって、とびだしていってしまった。やがて、テントのそとに、とんきょうなさけびごえがきこえた。かえってきたのだ。その声の調子をきいただけで、われわれの運勢が、「吉」とでていることがあきらかだった。下手の川の水は、「北にむかって」流れていたのである。

わっと歓声があがった。ほかでもない。それは、食糧係り土倉の手によって、食糧統制令が、一部解除されることを意味していたからである。食事の不足に、だれよりもいちばん苦痛をおぼえていたのは、じつは、とびぬけてからだの大きい、食糧係り自身だったのだ。われわれは、青ぞらのしたで、心ゆくまで餅焼きをたのしん

だ。この日は、夕ぐれまでに五、六回も、はげしい夕立ちと青ぞらとをくりかえした。いよいよ本格的な夏がきたのだろうか。

ニジネ・ウルギーチ

解放され、のびのびとした気分で、われわれは、北に流れる谷をたどった。解放されたエネルギーは、野帳のなかへとそそぎこまれているようだった。藤田は、たびたび足をとめては、ハンマーをふるった。梅棹は、けもの糞の分布を、あいかわらず記録しつづけていた。川喜田もまた、胴乱をとりだして、肩にかけはじめた。太陽が、カッとてりつけると、山火事あとの礫原は、むしかえすように暑くなった。ヒースのなかには、森林を復活させようと、カラマツとシラカンバの若木が、いきおいよくのびあがっている。ときには、シベリアアカマツも。いたるところにひろがるイェルニクのマメカンバのなかには、キンロウバイのあざやかな金いろの花や、うす黄のケヨノミの花が、ちりばめられていた。この日の谷には、ほとんど小灌木さえもおおわなない、みごとなミズゴケ濕原もみつかり、ヒメツルクケモモや白い花のトナカイソウにまじって、めずらしくも、眼のなかにはいるほど小さいなムシトリスミレが、あかいミズゴケのクッションのうえに、はえていた。満洲全部を通じて、ただこの一カ所だけからしかみつかっていない、この植物は、のちにカラフトムシトリスミレと同定された。

河辺林のしたは、ベニバナイチヤクソウの肉いろの花穂で、はなやかにかざられはじめた。さいごに、河すじの砂原には、そら色の花をつけた、すばらしくうつくしいハナシノブが咲きはじめた。夏だ。すっかりのびきった青草のおかげで、馬は日ましに太っていった。

夏とともに、吸血昆虫もまた、活躍をはじめた。たった一日のちがいで、われわれは、蚊の群れになやまされるようになったのだ。アブも、蚊といっしょになって、終日馬の腹や尻につきまといはじめた。ふしぎなこと、それは、黒馬におおく、白馬にすくなかった。それでも、上流ばかりをあるいた支隊は、本隊ほどにはアブになやまされなかった。もっとも、吸血昆虫がとりわけ猛威をふるうのは、もっとおそく、夏のおわりであるらしい。このちいさな悪魔どもの害をさけるためにも、春から初夏をえらんで探検をやるべきだと考えた、われわれの計画は、まちがってはいなかったのである。

やがて、この河すじの中流で、なまなましいオロチョンの足あとに、はじめてぶつかった。右岸にそうた、りっぱなオロチョン道で、まずふみあとがみつかった。ミズゴケや雑草のおしたおされているま新らしさ。スッパリと切られた若木。大きな立ち枯れにつけられた、あたらしいな目。これらは、ひとつひとつが、それぞれの意味をもっている。かれらのあいだでは、ちょっとしたこういう目じるしにも、一定の約束があって、交通のまねな山中で、おたがいにかわしあう言葉ともなり、通信ともなるのである。さんねんながら、われわれには、じゅうぶんにそれをよみとる能力はなかった。

なた目には、やにを吹きだしたばかりのものもある。また、豪快な焚き火のあともあった。そのそばには、器用にカラマツの枝をけすった、湯わかしかけ。いまにも待望のトナカイ・オロチョンにあえそうな気がして、われわれは、そのふみあらされた小道のさそうにまかせて、左岸にわかれた小谷へとはいってみた。しかし、小道は、その小谷から西へ尾根をこえ、われわれのゆく手からそれてしまわらしかった。デルスウを氣どって、われわれが、せい一ばいに、この足あとをよみとってみた結果は、こうだった。いまから一週間とはたたないまえに、かれらは、西にあたるビストラヤ本流のほうから、山ごえして、この小谷をくだって、ニジネ・ウルギーチにき

た。人数はごくわずかで、トナカイに食糧をつみ、本谷の上流下流にわたって、狩りにでかけた。そして、数日のあいだ寝泊まりして、たぶん引きかえしたばかりなのであろう。また、五月下旬か六月上旬ころにも、かれら一度やってきたことがあるらしい。このあたりは、もはやオロチョンの住居地帯ではなくて、ただ狩りにだけでくる地域であろう。というのは、ユルタ跡をみかけなかったからである。

さんねんながら、この解説は、あくる日の旅で、たちまちその一部分を修正しなければならなかった。さらに半日行程ほど下流で、ひと月くらいまえまで人のすんでいた、四つの密集したユルタあとと、トナカイの道いこみ場の棚とをみつけたからである。

いまでは、われわれは、オロチョン道の性質についても、たくさん知識をもっていた。トナカイ・オロチョンの道は、馬オロチョンの道のように、谷を上下にながく連続してとおっていることはない。かれらは、馬オロチョンとちがって、下流から上流へと週期的に移動するようなことはないであろう。そのかわり、もっともよくふまれた、移動路とおぼしい道は、河すじに執着しないで、たいてい枝谷のほうにすがたをけし、ときには、尾根をめぐってさえのぼってゆく。かれらの移動路が、どんな感覚にもとづいているのかは、ついにわれわれには、感じとれなかった。トナカイ・オロチョンを案内につれたひとびとの通った道は、プレチュケの場合でも、奇乾警察隊の場合でも、つねに枝谷から枝谷へとわたりあるいていて、決して大河の谷をつたってはいないのである。一方、狩りにつかわれるとおもわれる道は、いたるところにみられるが、その特長は、出沒ただならぬ点にあるといえよう、まえにもいったように、山すその乾燥地や、河辺林のふちは、もっともしばしば利用される。しかし、河辺林のなかにも、流れの兩岸はいうまでもなく、おなじがわの林内でも、併行した道がいく本もはしり、ときにはもつれあっていることもある。山すその道も、支流の谷にぶつかるあたりでは、きつといりみ

だれて不明瞭となり、なれないうちのわれわれをこまらせた。じつは、これらのいりみだれた小道は、けもの道であるのかもしれない。たぶん、おわれるけものと、おうオロチョンとは、おなじ道を共有しているのである。それからもうひとつ、ユルタあとがでてくると、かえって小道は不明瞭にいきまじって、どこかへ見ろしなわれてしまふのがつねであった。

一九日の午後、こうした、氣まぐれなオロチョン道のひとつが、右岸の急斜面へと通じていた。この谷にくだって二日め、もしわれわれの天測と推測航法とが正しかったとすれば、おそらくきょうは、ふたたび航空写真の圈内にはいるだろうとおもわれた。そして、この谷が、まさしくニジネ・ウルギーチそのものであったとすれば、推測航法の結果からおして、一〇キロばかり下流に、航空写真にあらわれた、ふたつのはげた崖がみつかるはずだった。われわれが、この道をえらんで、丘のうえにのぼったのは、そこから、この絶好のめじるしをさがそうとしたからであった。

われわれは勝った。どうだ。ちょうど予期したあたりに、まるで符節をあわせたように、ふたつのはげが、ニジネ・ウルギーチをみおろして、はるかにのぞまれるではないか。白色地帯はおわった。わたくしたちの意氣はまさに天をついた。

この夜は、ふたつのはげにちかく、河原の砂のうえにごろ寝することにきめた。めんどうなテント張りは、さっぱりとやめた。それよりも、大饗宴の準備が第一だった。食糧統制令は撤廃だ。ひややかにうつくしい砂地のうえの、この夜の光景は、げにすさまじいかざりだった。ああ、腹いっぱい飯盒のめし。それぞれ飯盒ひとつぶんくらいはたいらげたあと、ホットケーキが、つきつきと焼かれた。山もひびくと、歌もうたった。われわれの食欲は、胃の負担をこえて、とどまるところを知らず、満腹のあまり、苦しまぎれに砂原をころげまわった。

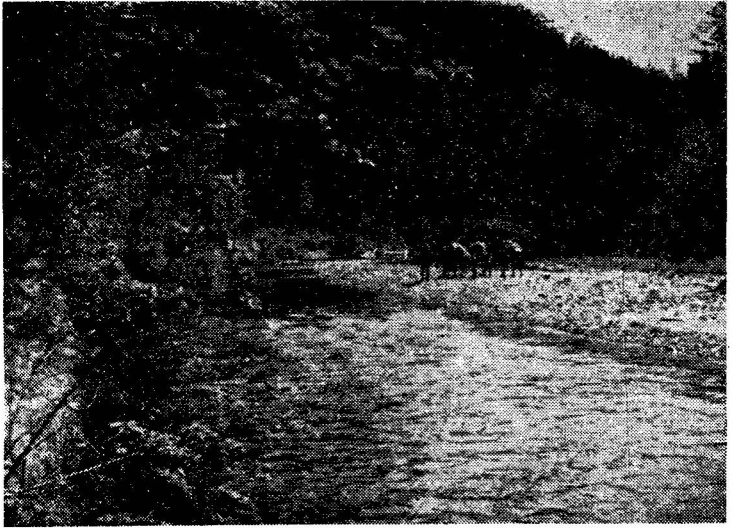


図 45. ニジネ・ウルギーチの中流にて。

川喜田は、とうとう、せっかくつめこんだものを、また外界へと還元してしまった。そして、一同を嘩然とさせたことに、すましてこういったのであった。

「口なおしだ。ようかんをくれ！」

ニジネ・ウルギーチは、オロチョン名を、ホロゴイヤともいう。ホロゴイヤのほとりに、うっそうとした河辺林がつづいた。カラマツの林は、いくぶん河の流れからとおさかった、湿地帯のそとがわにおしやられていた。しだいに海拔高度のひくまってゆくにづれて、谷の風景には、しだいに下流的な性格があらわれてきた。河辺林の木々は、山地林のものは、くらべものにならない大木ばかりだ。一方、山地の森林のほうも、しだいにその活力をとりもどしつつあった。山地林のカラマツのなかには、胸高直径三〇センチにおよぶものも、あらわれてきた。シベリアアカマツも、南むきの斜面に、眼をひくようになった。ホロゴイヤの大屈曲の頂点のあたりから、基地へとこえる峠の南斜面には、焼けあとに復活しつつある、密生したアカマツの小松原がつづいてい

た。

夏は、いまや、本格的なよそおいをこらして、われわれの勝利の道をかざっているようにおもわれた。濕地をおおうマメカンバのイェルニクも、いまでは、もえるような緑のじゅうたんとかわっていた。きのうあたり、ちらほら咲きはじめたと思っていた、下生えのヒースも、きょうはもう満開だ。カラマツの林をゆけば、イソツツジの白い花のかたまりと、肉いろの鈴のようなコケモモの花とが、どこまでも、うつくしいカーペットをくりひろげた。

峠をこえると、もうアルバジハの流域だ。基地は、もう眠のまえにある。ゆうゆうとしたところをみせて、この夜のキャンプは、基地から四キロのところたてられた。たそがれどき、土倉とフォーミンとは、乗馬で、基地をさがしにでかけていった。本隊に打電すべき電文をたずさえて……。

かえりをまつ三人のまわりに、ながい灰いろのたそがれが、しずかにすぎっていった。このとき、漠河隊は、ようやく基地について、そろって最初の夕食をかこんでいるところだった。基地の手前で、カラマツの幹から幹へと、すばしこくとびまわるリスを、本郷さんが射とめた事件が、話題をにぎわしていた。そのとき、とつぜん、かすかな銃声が、森のおくにひびいた。だれかが注意をうながした。しかし、そんなにはやく支隊の着くはずはない、なにかのまちがいだろう、という森下隊長の意見で、ふたたび、ガヤガヤと食事がはじまった。ややしばらく、森はまたもとの静かさにもどった。

土倉は、森のなかをかけぬけながら、とおくに銃声をきいた。リスをおう音だったのだ。いきおいをえたかれは、馬をはしらせる手をやすめず、空に拳銃をはなした。ひとはしりしては、また一発。

漠河隊員の耳に、こんどは、まちかで銃声がきこえた。つづいて、「エッホー」のよび声が、はっきりとききとれた。耳ざといだれかが、ハッと気づいた。「あれは土倉のこえだ！」

瞬間、一同は総立ちになって、てんでんばらばらに、應答のよびごえをわめいていた。まもなく、木立ちのなかから、忽然とふたりの騎馬すがたがあらわれた。わっというさわぎのなかで、ふたつの隊の握手は成った。われわれの第一目的、北部大興安嶺の縦断は、三河出發後わずか三八日で、はやくも達成されてしまった。

やがて、ふたりは、漠河隊から、加藤と川添とをつれて、また支隊のユルタ・テントへかえってきた。話の種はつきなかつた。われわれは、本隊がまだピストラヤの中流を、ゆっくりと北にすすんでいることを知った。また、漠河隊の江原は、先發隊として、すでに三日まえに基地についていたが、いまここにはいなかった。ある夜かれは、川喜田がまっさおな顔をして、よろめきあるいている夢をみた。かれは、じっとしておれなかつたらしい。森下隊長のとめるのもきかず、あくる朝には、一週間ぶんの食糧をもち、オロチョンひとりをつれて、風のように、ホロゴイヤの谷へと馬をとばしていったのであった。しかし、さすがにオロチョンはかしかつた。ホロゴイヤの中流にでて、われわれの足あとをみると、支隊がすでに馬三頭をつれ、四、五名の一行で、基地の方角へと通りすぎていったことを、みごとに「解説」してしまった。われわれが基地入りをした日に、かれもまたひきあげてきた。

六月二一日、この春のなごりの霜をふんで、支隊は基地にはいった。われわれが、あれほどまでに出あうことを期待していたトナカイ・オロチョンたちは、漠河隊と行をともにしていた。奇怪な枝角をゆらめかしているトナカイの群れ、濕地に草をはむ馬、雑然とした林空のキャンプ。二〇日間の孤独は、ふたたび大部隊のざわめきのなかにきえうせた。(以上二節「川喜田」)

五、ビストラヤ本流からアムールへ

赤ひげの獵師

悲壯な責任感をおわせられて、せい一ぱいに行程をはかどらせていった支隊にくらべると、本隊のすべりだしはにぶかった。ぶじに大興安嶺の分水嶺に達し、支隊をおくりだしてしまつたあと、われわれには、一種のかるい中だるみがきたようだった。航空写真のみちびくとおりに、ピストラヤの河すじをたどってゆくほかに、さしあたり、これという手ぢかな目標のなかつたせいだろう。もちろんお天気もわるく、氣のゆるんだせいばかりでもなかつたが、本隊は、ピストラヤの本流にでるまでに、五日もかかつてしまつた。馬オロチョンがコンホ、トナカイ・オロチョンがセワルトという、さして長くもない支流を下るだけの行程だったが。

第一日めのやどりは、コンホを数キロくだった、かなり大きな合流点だった。合流点のひろい濕地をひかえた、段丘のうえのカラマツの疎林は、新緑の色を、あかるくテントになげかけた。うしろの山腹には、ムラサキツツジが、えんえんとつづく花ぞのをくりひろげていた。雨の滞在ときまつたあくる日、小雨のけぶるなかを、ひとり林にさまよいこむと、数しれぬ小鳥のさえずりが、大氣をみたしていた。アカオカケスが、ちらりと赤い色をきらめかせて、矢のように枝をくぐる。コンホの入り江の水はぬるんで、モノアラガイが、枯れたアシの莖を活潑に這っていた。野地坊主の枯れ葉のしたには、みずみずしい太い芽が、数センチものびていた。馬の危機も去つたわけだ。寒さをわすれて、テントのなかのねぶくろのうえで、のびのびとひるねするたのしさ。

しかし、春のあゆみは、ひと足おそすぎた。草木のうたう春のおとずれにそむいて、前日のゆうぐれ、一頭の白馬が死んだ。このキャンプまで、りっぱに一駄の荷をしよいおおせてきたのに、暮れかかる林のなかに、ばっ

たりたおれて、すぐに死のけいれんがきた。パートリンのもち馬だった。第一一キャンプの滞在に草がつきて、異物を食ったのがもとの痲痛らしかった。ロシア人の焚火のあたりには、ぎごちない空気がただようていた。わずかの雨に滞在ときめたのにも、たしかにその心理的な影響があった。がらんとした大テントにすみつくことになつた三人——伴と小川と吉良とは、ひさをかかえてゆううつだった。馬の死——それは、なお春をうしろに河をさかのぼってゆく支隊の、あすの運命ではないだろうか。きょうの雨は、漠河隊をも、ラオコウの南数キロのところ、とじこめていた。せまいひとつのテントに頭をあつめて、雨のおとをきいている川喜田や梅棹の氣もち、どんなだろうか。午後になって、ナーラチで支隊をおそつたのおなじ夕立ちが、はげしくテントをたたきつけた。どうかこれが、本格的な雨期の前ぶれではありませんように……。口にはださないけれど、おなじ氣もち、三人には、わかりすぎるほどよくわかつていた。あとにもさきにも、えがたい友だちをうしないはしないかという不安が、このときほど身にせまってきたときはなかった。

つぎの日には、おもいがけない事件が、われわれを待っていた。出発してまもなく、ひろい湿地にのりだしたとき、めざといガイブシヤンは、ゆくての山すそに、ポツリとひとつ白い点をみつけた。馬だという。双眼鏡には、まさしく一頭の馬と、うすよごれたテントらしいものがうつつた。さあなにもものだろう。オロチョンでないことは、たしかだ。佐藤さんあたりから、密偵ではないかという説がでた。拳銃を用意しておいたほうがよいでしょう、という話になってきた。ところが、あいにくわれわれのモーゼルは、リュックサックの一ばん底にほうりこまれて、馬のせなかに、がんじがらめになっている。はじめこそめずらしくて、うれしくて、ポンポンやってみたが、音がするだけで、われわれのうでまえでは当るはずもなし、第一、モーゼル一号というやつは、腰にぶらさげてあるくには、重すぎたのだ。われわれは、あきらめよく無手勝流ときめた。

右から流れこんでくる、増水した流れを、駄馬の尻馬にのってこえると、もう問題のテントの数百メートル手まえだ。ガイブションが、しのび足で近よってゆくと、これはしたり、大塚さんの声がきこえるではないか。交信のために、無電テントと一頭の馬とを、一と足あとにのこしてきたつもりだったが、大塚さんたちの濕地横断のルートが要領よかったのか、逆に一と足さきき、ここにたどりついていたので。ほっとしてかけつけてみると、見しらぬ三人のロシア人が、大塚さんとはなしこんでいた。

事情はこうだった。かれらは、ゲン河上流の部落にすむ白系ロシアの獵師たちで、ひと月ばかりまえから狩りのため山にはいった。あと二月ばかり山にいて、ピストラヤも五〇キロくらいは下ってみるつもりだが、ここまできて、四人づれのひとりが熱をだしたので、よわっているのだという。それぞれ旅行証明書をもっているし、そのへんの木の幹の皮をはがしたあとに鉄砲のマークや KAZAK などとらくがきしているところなど、ますますあやしい者ではなさそうだった。そとにいる三人のうち、若いふたりは、黒い綿服やルパシカに戦闘帽などかぶっていたが、リーダー格の年かさのひとりには、びったりと身についた、皮の上着に皮のズボン、それに皮のモカシン、毛皮の帽子と、いろいろでたち、なかなか風格のある獵師



図 73. 赤ひげの獵師。うしろは、カラマツの皮をはいで、それをまるくまげてつくった、ひとり用のかけ小屋である。

すがただった。帽子からは、赤い毛がはみだし、ぼうぼうとのびた、トウモロコシの毛のようなちぢれひげのなかから、灰いろの眼が無表情にのぞき、柔和な声が女性的にひびいた。それは、本来はえぬきの農民ではないコサツクの生活の、ちがった一面を印象づけるにじゅうぶんだった。さきをいそいでいなかったら、せめてひるめしをいっしょにして、もうすこし話をきいてみたいところだった。ところが、テントのなかの病人をのぞいてきた折口さんが、しぶい顔でこういったものだ。

「どうも発疹チフスのうたがいがありますな。逃げたほうが安全ですよ。」

もちろん、すでにシラミは、われわれのあいだにもひろがっていた。逃げるより手はない。もちろん、D・D・Tなどのなかったころの話である。

赤ひげとわかれてまもなく、はげしい雨がおそってきた。しばらくわかれていたコンホの流れが、みちがえるような濁流となつて左手からあらわれ、右手に急な礫の崖をひかえた、せまい河辺林のなかで、われわれは、やむをえず不時着して、テントをはらなければならなかった。ふりしきる雨のなかを、「堪達罕看々ペンダハンカンカン」とでていったガイブシヤンは、夕食のおわるころかえってきた。すぶぬれのすがたで、テントの入口から顔をのぞかせたかれは、「堪達罕有」とひとことをのこして、ロシア人たちの焚き火のほうへ去っていった。ふだんはおとなしく柔和な眼が、雨のしずくにぬれたまつ毛のしたに、ぎらぎらとかがやき、腰をこえるコンホの濁流をおしわたってきた野性の火にもえていた。

おかげで、小雨にふりこめられたあくる日も、たいくつしなかった。青草のもえだしたせいとか、あばらの肉や内臓には、ハンダハン特有のにおいが強くなったが、しばらくぶりの肉は、雨の日のしょさいなさを、心ゆくまでなくさめてくれた。うしろの礫の崖では、ナキウサギがしきりとないた。じっと崖の途中で息をこらしている

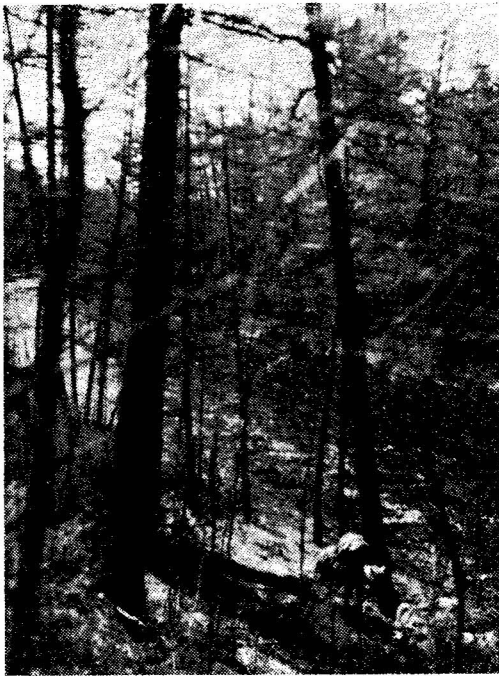


図 74. コ ン ホ.

と、大型のネズミくらいのやつが、ときおりひょっこりと顔をのぞかせ、とがった石のあたまにのぼって、あたりをみまわしては、チチーッ、チチーッとないた。あしもとのキャンプは、くれかかると土砂ぶりのなかでこそ、足場のわるい不時着場としかおもえなかったが、一晩すみついたあとでは、いつのまにかおちついた感じをとりもどし、サンフランシスコからおくられてくる、「ヴォイス・オブ・アメリカ」放送の音楽が、無電テントから流れでて、焚き火のけむりといっしょに、ヤナギのこすえに消えていった。

七日の早朝は、ふかい霧が谷をうすめて、晴れとも雨ともきめかねた。しかし、これは、このち毎日のように、ピストラヤの谷でわれわれを見舞った朝霧だった。日のさしはじめる時刻になると、河辺林のこすえにまといついていた霧が、みるみるうすまきはじめて、ぱっと日本晴れの空がのぞいた。おとこの午後からあらわれた、りっぱなオロチョン道は、らくらくと下流へとみちびいた。黒い豆つぶのようなトナカイの糞がおちていた。ふるい馬の糞もみつかった。デン河の馬オロチョンが、冬に狩りにきたのだという。ピストラヤ本流にちかく、右岸にせまった急な山腹のトラヴァースには、きもをひやした。足もとには、ビール色の水を満々とたたえて、深さのしれぬコ

ンホが山すそをあらひ、算をみだした倒木のひとつに駄馬がつかまらずいたら、そのまま流れにのまれてしまうだろう。じっすつなぎになった馬をきりはなして、慎重に斜面をわたしているあいだ、われわれは、斜面の日だまりに腰をおろして、おくれた隊列を待った。新緑の林をぬってながれるコンホの、すごみをおびたながめは、いくから見ても見あきなかった。あたたかい日だまりには、ダニもあつまってきて、しきりに皮ゲートルのすきまにはいあがってきた。

やがて、待望のピストラヤの谷がひらけた。コンホの合流点には、横断距離二キロちかくもあろうとおもわれ、大湿地がひろがり、そのむこうに、トロイデをおもわせる、めだつた岩山がそびえている。この山は、馬オロチョン名を、アムグル・ゴグダ（馬の鞍）といった。湿地のふちは、例によってイェルニクにおおわれているが、アムグル・ゴグダのすそを流れている本流にちかづくにつれて、ヒメカンバの脊はひくくなり、野地坊主ばかりの湿地とかわってゆく。野地坊主のあたまでは、あたらしい野火にやけて、のぼしかけの頭のように、若芽ばかりがつつたっていた。本流の河べりに達してテントをはろうという心づもりは、河辺林のなかの、ふくざつな旧河道と、それをうすめる倒木にさまたげられて、第一七キャンプは、湿地と河辺林との境にある、よどんだ三日月沼のほとりにえらばれた。しずかな沼の水面には、ときおり、シューカとおぼしい魚がはねて、波紋をえがいた。

あくる日の朝は、渡河点の偵察についやされた。吉良はやや上手の本流へ、伴はコンホのほうへ、それぞれ二三人をつれて、乗馬ででていった。吉良の隊には、ゆうべ、ひとり馬にのっておいつてきた赤ひげがついてきた。かれが、なんのためにここに来たのかはわからなかったが、たぶん、あやしげなわれわれの隊の行動をうかがいに来たというのが、本音であつたらう。本流にでてみると、一〇〇メートル前後の河はばに、増水した流

れは一ぱいにあふれて、馬をのりいれてみるまでもなく、とうていわたれるみこみはなかった。前夜赤ひげのうちこんでおいた、ヤナギの枝の即席の水位標によれば、わずか二―三センチしか水はへっていなかった。赤ひげの話では、平水より一メートルくらいの増水だといった。河原の砂地にしゃがんで、かれのえがきだしてゆく見取り図によると、対岸には、高みをとる道があり、またこちら岸にも本流ぞいに道がある。それをたどってゆくと、ナーラチ合流点ちかくの本流の大屈曲点で本流をはなれ、さらにふたつにわかれて、ひとつはゲン河へ、ひとつはクマラ河へと下ってゆく、ということだった。支隊のとおってゆく、ナーラチから上流のビストラヤの谷は道もなく、ただ一めんの森林とイェルニクとにとざされているという。

われわれは、いずれ本流の右岸にそそぐニジネ・ウルギーチをさかのぼる予定だったから、いつかはいまいる左岸から河をこえて対岸にうつらねばならない。河をわたるなら、なるだけ早くわたっておいたほうがよい。大河ビストラヤの下流で、本格的な雨にでもであつたら、それこそとりかえしのつかないことになるからだ。けれども、偵察の結果は、いまずぐ本流はわたれないという結論となった。午後、われわれは、伴の偵察してきたルートにそうて、左岸ぞいに本流をくだって、コンホをわたり、ビストラヤにのぞんだ、うつくしい草地へとキャンプをうつした。

河辺林のなかは、むっとこもるような草いきれだった。灌木の葉はのびきっていた。シマリスや小鳥が、幹から幹へとびまわった。ひさしぶりに青草を腹一ぱいくった馬は、こがね色の糞をおとしてゆく。コンホの河原には、おりからまたふりだした小雨にぬれて、白いサクラソウの花がゆらいだ。キャンプ地は、かわいた草原が、切り岸になって本流にのぞんだ、理想的な場所があり、ひさしぶりのオキナグサの花ざかりだった。湿地のほとりには、チシマキンボウゲやカラフトネコノメソウ、リュウキンクなど、北國の春の花が、かわいい金い

ろに咲きはじめた。われわれは、ここを、アネモネ・キャンプとよんだ。(吉良)

ナキウサギそのほか



図 75. アムールナキウサギ
Ochotona hyperborea (Schrenck).

第一六キャンプの礫崖でみつけたナキウサギは、いろいろの点で、興味をひく。ナキウサギは、分類学的には、ウサギにちかい齧歯類の動物であるが、かたちと大きさとは、むしろネズミに似ている。茶褐色で、ドブネズミ大、尾がほとんどなく、耳はちいさく、両肢はみじかい。われわれのコンホで採集した標本は、アムールナキウサギ *Ochotona hyperborea* と同定されたが、おなじ種に属するカラフトナキウサギ *O. hyperborea yoshikurui* は、北海道の大雪山や南カラフトにもみつかっていて、やはり、おもに森林限界以上、ときには平地の岩場に、群れをなしてすんでいる。^①岩場にすむのは、どこの産地でも共通らしく、大興安嶺でも、とくに礫原だけにいるようであった。そのなき声に気づきさえすれば、群棲しているために、ときにはやかましいくらいなのだ、声がよく鳥に似ているので、みのがしやしい。われわれも、今西隊長がいなかったら、きっとみおとしただろうとおもわれる。本隊が確認したのは、このコンホの第一六キャンプだけだったが、支隊は中央部の礫原で、なき声をきいており、またガイブシヤンによると、ガン河にもいたるところたくさんいるという。アルバジハ流域にもすんでいることは、ほぼ確実である。馬オロチョンは、イニョキとよんでいる。

礫の斜面をよくみると、いたるところに穴の入り口があり、径数ミリの黒い丸い糞がたまっていた。入り口には、まだ氷のはっていることがおおかた。永久凍土地帯では、穴にすむということが、かならずしも、あたたかい避難所を意味しないのだから、かれらは、ほとんどつねに氷点下の環境でくらしていることになる。胃の内容物は、よくくだかれていて、正体をつきとめにくかったが、あきらかに植物性で、緑色をとどめており、草の若い茎をかるうじてみわけることができた。ガイブシャンによると、ナキウサギは、若芽を常食にしており、夏のあいだに草をあつめて、穴の近所へたくわえておき、冬はそれを食っているという。犬飼哲夫教授のしらべた大雪山のナキウサギも、やはり冬の食物をたくわえる習性をもっていることが、くわしく報告されている。カラフトでも、穴を中心として一定の歩道があり、秋になると、カンバ、ハンノキ、灌木類などの子実を、さかんにたくわえるという。

ナキウサギは、北半球の北部にひろく分布しているが、その分布の中心は、中央アジアの乾燥した高地帯にあつて、もともと乾燥氣候の動物であるように思われる。シナの行政区画に属する、チベット、モンゴリア、トルキスタンから西シナにかけて、じつに一一種と一〇変種とが報告されている。この事實は、大興安嶺をふくむ東シベリアの氣候の、半乾燥的な性格と、なにほどの関連をもつものかもしれない。

内モンゴルのチャハル地方の調査報告によると、ナキウサギのすんでいるのは、優占植物として、コベノムレスズメ *Caragana microphylla* のはえているような、砂丘と岩山とである。そして、おもにかわいた草原を中心としてすんでいるハタリス *Citellus dauricus* や、耕地の動物であるスナネズミ *Meriones sp.* と、それぞれちがった性質の土地をすみわけているという。また、ホロンバイル地方では、しめった水辺の土地を、ハタネズミがしめているそうだ。



図 76. チョウセンシマリス

Eutamias asiaticus uthensis (Pallas).

でなく、地上ちかくに生活の本拠をもっていて、地上や木のほら穴にある巢から樹上へと上下運動をする。いわば、その生活形は、完全な地上生活者であるハタリス属 *Citellus* と、完全な樹上生活者であるリス属 *Sciurus* との中間的な位置をしめるものであらう。

これにくらべると、ホクマンリス (図 67) は、リス属の一員として、まったくの樹上生活者である。われわれの射とめた一頭は、基地のカラマツのこすえで、枝から枝へ、幹から幹へと、みごとに跳躍ぶりをみせて、漠河隊員をおどろかせた。その巢も、高いカラマツのうえにある。したがって、その個体数も、カラマツの密林のみ

大興安嶺でも、水にちかいしめった土地、たとえば野地坊主湿地のふちや、谷のイェルニクのしたに、しばしばネズミ類の穴をみた。ネズミ類の生活空間は、こうした、かなり深い土の堆積した、河谷の部分にかざられているらしい。採集した種類はすくなく、ガン河の上流シャジ合流点で、モウコハタネズミとヤチネズミとを、コンホとピストラヤとの合流点ちかくでモウコハタネズミをとらえた。これで見ると、これらのネズミ類は谷にそって、かなり上流まで分布しているらしく思われる。

大興安嶺の森林地帯には、ハタリスはもういない。そのかわりに、チ

ョウセンシマリスとホクマンリスとの、二種のリス類がいる。シマリスは、全行程のいたるところにみられたが、どちらかといえば、あかるい

谷の疎林や河辺林におおいようであった。シマリス属 *Eutamias* は、

ground squirrel という英名のしめすように、じゅんすいな樹上生活者

ろがる地域におおく、おもに谷をあるいたガン河やピストラヤ中流の行程では、ほとんど眼にふれなかった。馬オロチョンの狩りの対象としてすでに説明しておいたように、ガン河流域では、源流地方をのぞいて、リスはすくない。しかし、アルバジハ流域にはいると、その個体数はひじょうにおおいらしく、トナカイ・オロチョンたちの、おもな冬の狩りの目標となっている。オロチョンばかりでなく、この季節には、シナ人の猟師も、リス狩りのために山にはいる。アルバジハ流域からのホクマンリスの毛皮産出量は、莫大な量にのぼるのである(表10)。

そのほか、北部大興安嶺に産するという記録があり、オロチョンがその存在を知っていた齧歯類としては、カワリウサギ *Lepus timidus* モモンガ *Pteromys russicus* などをかぞえることができるが、数はすくないらしく、でくわすことができなかった。(梅棹・吉良)

〔註〕

- ① 玉貫光一(一九四四) 樺太博物誌。東京、弘文堂。三二四—五ページ。
- ② 阿部余四男(一九四四) 支那哺乳動物誌。東京、目黒書店。
- ③ 篠田 純(一九四七) チャハルの鼠族分布とその指標植物。生物二巻四號、一一九—一二一ページ。

森林の構造 (2)

支隊とわかれてコンホをくだってゆくわれわれの眼を、まずひきつけたものは、両がわの斜面にみられる、縮のような森林のたたずまいであった。谷のそこから、わりあい傾斜のゆるい斜面の下部はカラマツの林におおわれていたが、中腹からうえは、いっせいにシラカンバが優勢となっていたのであった。南にむいた斜面については、すでに、ソルノピョーク地形とむすびつけてのべておいたような説明が、ある程度あてはまるであろう。



図 77. 礫性の土地にそだつチョウセンヤマナラジ。コンホ上流の右岸、南むき斜面。

で礫層にとどき、そのうえに、五センチそこそこの腐植土層と、灰褐色のうすい表土層とをのせているにすぎなかった。もっと上のほうのシラカンベ林内では、表土はより色が濃く、礫層は二〇センチあまりの深さにあつた。

斜面の下部ほど礫層の浅いのは、凍結のとける深さがあさく、したがって風化ないし土壌生成作用の不活潑な

ただ、ピストラヤ流域にはいってからは、いっそう地下的の礫層の存在がめだってきて、土壌の発達が変わるという条件がくわわってきてはいたが。たとえば、第一二キャンプのコンホ右岸の斜面では、下部のカラマツ林内ではわずか一〇センチあまり



図 78. エゾノムラサキツツジの密生。図77とおなじ地点、
らしろのカラマツ林のなかでは、しだいにツツジが
減少する。

ためであろうが、一部は礫そのものがゆるやかに下方へと移動するせいでもあろう。いずれにせよ、シラカンベは、礫のおおい、土壌の浅い斜面とは、むすびついていない。とくに、礫層が礫原として露出しているような部分には、カラマツが生えていることはあっても、シラカンベはほとんどみられない。これが、土壌の物理的な性質そのものの影響であるのか、あるいは、礫層が浅い

——ときには露出しているような斜面に地下水位が浅い(二〇九メートル)ためなのかは、はっきりしない。かなり傾斜のある南むき斜面で、礫に富んだ表土をもっている場所には、しばしば、シラカンベのかわりに、チョウセンヤマナラシをおおくみることがあった。ガン河でも、角礫の露出しているソルノピョーク斜面の上端には、ヤマナラシの木立ちがつきものであった。

こういうシラカンベやヤマナラシの林には、エゾノムラサキツツジの密生した下ばえがつきものであった。そのなかには、ときおりタイリクハンノキがまじり、ピストラヤの中流以北では、まれにトウナナカマドのすがたをもみうけた。その下では、カラマツ林に特有な、コケモモ、イソツツジのヒースは、あまりよく発達しないで、いろいろな草本をみることがおこった。のちに、

チウセンキバナアツモリソウのうつくしい花をみたのも、おおくは、こうした場所であった。

一方、南斜面ほど顯著ではないが、北むきの斜面でも、傾斜がかなり急であれば、やはり似たような縞状のすみわけがみとめられた。コンホ合流点からジン川合流点までの、本流の左岸の斜面でも、すこし高くにのぼると、しだいにカラマツのなかにシラカンバがまじり、同時にムラサキツツジやタイリクハンノキの下生えがふえてくるのをみとめた。北斜面では、南斜面よりもタイリクハンノキの量がおおく、ときには前者をおしのけて、大灌木層を優占する。この場合は、もはや、南斜面のときとおなじ説明を、そのままではめるわけにはゆかないが、傾斜の増大につれてシラカンバのふえてくることはたしかであった。これが海拔高度のせいでないことは、斜面をのぼりつめて尾根のうえの平坦面にでると、またカラマツ一色の森林となることから明らかである。

源流地方では、かなりシラカンバの存在がめだつたが、コンホを下って本流の谷にでるとともに、山腹の森林はふたたび圧倒的にカラマツによって優占されるようになった。ただその例外をなすのは、山火事のあとであった。もちろんガン河でも、いたるところに、根もとのこげたカラマツ林をみたが、われわれの印象では、ピストラヤの流域では、いっそう山火事の頻度が高いようであった。谷に近い森林にかぎらず、すつとふかい山のなかでも、いたるところに焼けあとをみるのであった。たぶんこれは、馬オロチョンとトナカイ・オロチョンとの、生活習慣のちがいによるものであろう。ふしぎなことに、どちらも、けっして焚き火のあとをしまつをしない。しかも、トナカイ・オロチョンは、夏のあいだ、虫をきらうトナカイのために、蚊いぶしのたいまつをたえず持ちあるき、ひと休みごとに、きつと火をたく。そして、そのあとを、もえ放しですてておくのである。本隊がピストラヤの谷をゆくあいだに、山火事の煙をみたのは数回にとどまらないし、また、基地以後の行程で、われわれ

のつれたトナカイの列が、休むたびごとに、あとにぼやをのこしてゆくのを経験した。こういう習慣をもたない馬オロチヨンの生活領域よりも山火事の頻度のたかまるのは、とうぜんのことであろう。

こうした山火事は、カラマツにたいするシラカンバの、一時的な優勢をひきおこす。ただし、そのプロセスは、エゾマツやトドマツの類の常緑針葉樹のタイガの山火事のあとに、シラカンバがまず林をつくるという、一般によく知られている現象と、おなじではない。この場合には、陰樹であるエゾヤトドが、火事のあとの裸地にすぐそだつことができず、まず陽樹であるシラカンバが生えるのであるが、カラマツは、シラカンバにもおとらぬ典型的な陽樹だから、その点では、両者のあいだにハンディキャップはない。その経過はこうである。まえにものべられてるように、カラマツ林の下生えをなすイソツツジ、コケモモなどは、ひじょうにもえやすい。そして、大灌木のすくない、枝下のすいたカラマツ林に火がはいると、山火事は、ひじょうな速さでもえすすみ、立ち木の小枝と葉とがぱっともえあがったところには、地上の火はどんどん先きへ進んでしまっている。したがって、山火事あとには、葉だけのもえた立ち木がそのままのこっており、とくに枝下の高い大木は、幹がこげるだけで、枝には火がつかずに生きのこることがおおい。ところで、この程度のもえかたでも、カラマツはそのまま枯れてしまうが、シラカンバのほうは、地上の部分は死んでも、根は生きのこり、すぐあたらしい芽をだす。下生えのイソツツジやコケモモも、やはり耐火力がつよく、生きのこった根からすぐ回復する。その結果、山火事のあと数年たつと、下生えのヒースはもとどおりに生いしげり、そのうえに、白骨となったシラカンバの立ち枯れと、シラカンバの若木とが立ちならんだ、特有の風景をつくるのである。こういうシラカンバは、たいいてい数本の株立ちとなった幹をもっているのので、すぐそれとみわけがつき、年輪をかぞえれば、山火事のふるさを推定することもできる。これは、さすがのガイブシャンも知らない、森林の歴史のよみとりかたであった。



A



B



C

図 79. カラマツ林におよぼす山火事の影響。
A (山火事の直後), B (数年のち, コケモモの下生えが復活し, シラカンバは株立ちとなり, やけのこったカラマツの木が点在する。幹にはこげたあとがみられる), C (おなじく数年のち, 枯れたカラマツは, 白骨となって林立し, シラカンバの林とかわろうとしている。イソツツジの下生えも復活している)。

このような山火事あとには、密生した下生えの復活によってまたげられながらも、しだいにカラマツの若木がそだってくる。そして、二度と山火事にかかることなく長い年月をへたならば、シラカンバより高くなるカラマツは、しだいにシラカンバを圧倒して、いつかはカラマツ林となってゆくだろう。しかし、ひんばんな山火事のくりかえしは、たえずシラカンバに有利にはたらい、カラマツ林のなかには、いつもかなりの量のシラカンバがまじっている結果となるわけだ。本隊が、なにかの事情で谷をはなれて、一段と高い尾根のうえの平坦面にのぼると、きまって、新旧さまざまの段階の山火事あとにでくわした。そういう場所は、交通量のおおいオロチン道が、きまって通っているのである。



図 80. シラカンバ若木の密生。ニジネ・ウルギーチとクマラ河との分水界附近。下にハイマツが生えている。

また、われわれの行進をさまたげたもののひとつに、カラマツやシラカンバの若木が、ひじょうな密度ではえそろっている場所があった。その面積は、ふつうごくせまいが、まるで竹やぶのように密生していて、駄馬がぐりぬけるのは、なみたいていな苦勞ではなかった(図32の背景および図80)。これは、山火事の火勢の強かった部

分で、下生えも回復できないまでもえつくし、数年裸地のままのこっていたところに、種子がおちて一せいに生えそろったものとおもわれる。針葉樹やある種の廣葉樹の若木が、腐植のないむきだしの土に、とくに生えやすいことは、林業家のよく経験する事実である。

これまで森林の構造についてのべてきたところから、北部大興安嶺における、おもな森林型をまとめてみよう。まず、「カラマツ—イソツツジ・コケモモ型」は、もっとも安定したタイプで、しめる面積もおおきい。この型には、ふつう多少のシラカンバがまじっており、山火事によって、「シラカンバ—イソツツジ・コケモモ型」とかわる。それ以外の、シラカンバを主とする型は、おもにソルノピョーク地形の南斜面や、水源地帯の急傾面をしめ、「シラカンバ—ムラサキツツジ型」は、もっとも一般的であるが、とくに乾燥しやすい土地や、河谷の排水のよい土地に

は、「シラカンバー草本型」もめずらしくはない。高度のおおきい部分では、大灌木層にハイマツがはびこつた、「カラマツ—ハイマツ型」、「シラカンバーハイマツ型」もあらわれる(四〇一ページおよび図80)。また、カラマツは、礫性の土地ともむすびついて、「カラマツ—ハナゴケ型」をつくるが、シラカンバでは、そういうことはすくない。一方、濕性の土地に進出するのも、カラマツにかぎられていて、「カラマツ—コケ型」、「カラマツ—ミズゴケ型」などをつくる。前者は、場所により、スギゴケ類、フトゴケ、イワダレゴケなど、いろいろなコケの種類をふくみ、ガン河上流から北にすすむにつれて、しだいにめだちはじめた。しかし、大局的にみれば、コケ、ミズゴケあるいは野地坊主、イェルニクなどとカラマツとの結合は、局部的なもので、それほど重要ではない。「チョウセンヤマナラシ型」も、ほとんどいかに足りない面積をしめるにすぎない。

さいごに、シベリアアカマツを主とするタイプについて、のべておこう。ハイラル附近の砂丘に、シベリアアカマツの砂丘林のみられることは、すでに注意しておいたが、北部大興安嶺には、この砂丘林とはまったく不連続に、やはりシベリアアカマツが分布している。われわれが、はじめてシベリアアカマツの森林をみたのは、ガン河の第九キャンプの対岸、トゥラ河との分水嶺の尾根のうえであった。プレチュケの観察によっても、アカマツの分布南限は、やはりこの分水嶺のうえにあるという。^①ピストラヤ下流地方をしらべた福渡七郎たちは、森林ステップ帯の外がわをかぎるシラカンバの分布限界線や、その内がわをかぎるカラマツの分布限界線と併行して、アカマツの分布限界線もやはり北西から南東の方向に走り、南西から北東に、シラカンバ限界線・カラマツ限界線・アカマツ限界線の順にならんでいることを報告している。その線も、やはり、ピストラヤ下流から、ガン河の上流にむかい、ガン—トゥラの分水嶺をよこぎって引かれているのである。^②

このように、ステップの砂丘林と、北部大興安嶺のアカマツ林とは、とおくへだたって連続せず、生育地の環

境条件もまったくちがうので、あるいはべつの種ではなからうかとも想像される。ハイラル附近のマツが、モウコアカマツまたはハイラルマツとして区別される場合のあることは、まえに注意しておいたが(七一ページ註)、モホ附近で採集された北部大興安嶺産のものも、コッカアカマツ *Pinus Takahasi* という名で区別されることがある。しかし、これらをすべておなじ種と考える分類学者もおおいので、ここでは、すべてシベリアアカマツの名で統一しておく。

ところで、ハイラル附近の砂丘と、北部大興安嶺の森林地帯とは、まるで生育地の条件がちがうようにみえるが、よく注意してみると、そのちがいは、それほどはなはだしいものでもない。なぜかという、北部大興安嶺のシベリアアカマツは、きまって、やせた尾根すじの高みの、南ないし西にむいた斜面の上端部に、小面積の森林をつくって、斑点状に分布しているからである。ソルノピョーク地形とむすびつけて説明しておいたように、こういう場所は、北部大興安嶺としては、もっともかわいた土地である。アカマツ林のみられる場所は、たんにソルノピョーク地形の南斜面というよりは、いっそう限定されていて、とくにやや山頂状になった高みの南斜面の最上部——頂上のすぐ下で、岩礫性の土地というのが、もっとも典型的な分布条件であった。ピストラヤ上・中流の尾根のうえに立って北をながめると、波のように起伏する山々の波がしらに、点々と黒くアカマツの林がみとめられる。その存在は、濃緑色の葉のために、淡緑色のカラマツの樹海のなかに、くっきりと浮きでてみえた。このような、濕潤な森林氣候のなかで、もっとも乾燥した土地と、乾いたステップ氣候のなかで、もっとも濕潤な砂丘地とは、それほど水分条件はちがわないのであろう。シベリアアカマツが、土壌の反應などには、わりあいに鈍感で、もっとばら過濕の土地をさける性質のあることは、以前に、高橋基生博士により強調されたことがある。もっとも、西シベリアヤロシヤにゆくと、ミズゴケの高層濕原とむすびついたシベリアアカマ

ツ林がすくなくないらしいが、この種のように、西ヨーロッパから極東まで、きわめてひろく分布している種類では、その分布域のなかに、いろいろちがった性質の生態型が分化していてもふしぎはない。コッカアカマツやハイラルマツも、そうした生態型のひとつと考えるべきであろう。

さて、ティピカルな条件をそなえた場所では、シベリアアカマツは、小面積の純林をつくっているのがふつうであるが、極端な場合には、一めんのカラマツ林のなかに、頂上の附近だけ、数本のアカマツがまじっているような例まで、いろいろな段階のうつりゆきがみられる。アカマツの分布は、基地のちかくにとくに密なようで、そのあたりでは、例外的に、河辺林のなかにまじっているのもみられた。しかし、濕性をおびた土地のカラマツ林にまじっていることは、まずないといってよい。アカマツ林の下生えは、ムラサキツツジやマメカンベのような大灌木のこともあれば、不毛に近い礫地のこともある。南望山では、ハイマツと結びついた型も観察された。

〔註〕

- ① 福渡七郎ほか二名(一九四二) 興安北省北部天然林調査班報告。興安北省資源調査報告書、上巻、五一—四一ページ。
- ② *Plaetschke* (1937) op. cit. S. 69.
- ③ 北川政夫(一九三九) 滿洲國植物考。大陸科学院研究報告三、号外第一冊。新京。竹内亮(一九四一) 滿洲國に産する針葉樹の種類とその分布(予報)。滿洲帝國実験林時報三卷三号、二四三—二九八ページ。
- ④ 高橋基生(一九三九) 唐松及び赤松の環境的特異性。興林こだま二九号、二—七ページ。
- ⑤ *Katz, N. J.* (1926) *Shagnum bogs of central Russia; phytosociology, ecology and succession.* Jour. Ecol. 14: 177-202. 館脇操(一九四五) 東亞植物誌、北方篇(大阪、積善館)。三三—三四ページ。

ピストラヤの谷にたれこめた深い朝霧に、まんまとだまされて、うらかな春びよりをもう一日、アネモネ・キャンプでなまけたあと、六月一〇日から、本隊はうってかわった急行軍にうつった。というのは、このキャンプにあてて、治安部の八木少校の一行が、ちかく飛行機で連絡にくるといふ、おもしろい無電がまいこんできたからである。この探検に飛行機をつかいたいということは、計画のはじめいらいの、われわれのつよい希望であったが、費用と戦況との関係で、許可がもらえなかった。しかし、われわれがあんまりゆうゆうとあるいてるので、きつと八木さんや酒井さんは、じつとしていられなくなったのだから。たとえ予定外の飛行であったとしても、けつきよく空からの支援をうけることができるなら、われわれののぞみはかなえられるわけだ。しばらくのあいだ、手ごかい目標をうしなつて、氣ぬけのていであつたわれわれは、たちまち生氣をとりもどした。基地までもちそうもないので心配していた食糧も、補給してもらえることがきまつた。問題は、ただしい地図のないこの樹海のなかで、はたしてわれわれの所在が、うまく空からみつかるかどうにかかっている。このアネモネ・キャンプのような、ねこのひたいほどの草地にいては、たとえ大河ピストラヤに沿つて飛行機がとんできたとしても、とうていみづかりはしないであろう。われわれは、ここから五〇キロばかり西にあたる。ジン河の合流点が、対空連絡にはもつとも都合だろうと判断した。ピストラヤの本流は、そこで、西北西から北北東へと鋭角にまがり、ピストラヤ流域第一の大支流ジン河がそそぎこんでいる。そこには、きつと、大支流の合流点につきもののひろびろとした濕地がひらけていて、空から眼につきやすく、また滞在キャンプに適した草地もあるだろう。われわれは、この行程を、照つても降つても三日間で突破しようといふことにきめた。

急行軍の第一日の行程は、トナカイ・オロチョンの遺物でいっぱいだった。すでに二日まえコンホの川口ちかくで、われわれは、オロチョンの冬ごもり用のもののおき(図70)をみつけていたから、このあたりは、ピストラ

ヤ本流一帯を領域とするキラムト・オロチョンの、おもな居住地のひとつだろうと想像されていた。はたして、これまでにないよくふまれた道——われわれは、ガイブシャンにならって、「ヤクート道」とよんだ——が、本流ぞいに通じていた。アネモネ・キャンプから三—四キロ下流にそそぐ、セルムカンという小支流のちかくで、ヤクート道は、本流のふかい淵にのぞんだ切り岸にさしかかり、林のなかに、よくふみつけられた小さな空き地があった。ガイブシャンは、ヤクートの舟着き場だと判断した。話にきいている、スカールのように軽快なシラカンベ皮の小舟がどこか近くにかくされているかもしれない。うまくそれをみつけて、ゆうゆうと本流をわたるといふわけにはゆかないものだろうか。ゆくさきにひかえた本流の渡河という難問題は、あたまにこびりついてはなれなかった。

舟着き場から、道はセルムカンの谷をたどって山にさしかかった。道ばたの木は、スバリスバリと切りおとされたなた目をのこし、いまにもオロチョンがでてきそうだった。セルムカンの流れには、かれらのつくった魚どめのせきもみつかった。二〇メートルくらいの川はば一ばいに、カラマツの丸太とわり木とでせきをつくるのに、一本の釘も針金もつかわず、ほとんど木組みだけにたよっているのは、みごとなうでまえである。せきに



図 81. トナカイ・オロチョンのつくった魚どめのせき(カーデ)。

は、二―三ヶ所のすきまをつくり、そこにヤナギの小枝であんだかごがしかけてあった。春に河をさかのぼったタイムンやレノックが、秋になって下ってくるのを、このせき——カーデという——にひっかけてとるのである。汚物のひっかかりぐあいなどからみて、このカーデは、前年の秋のものだろうとおもわれた。近ごろタイムンにありつけない隊員たちは、みれんがましく、からのかごをのぞいていた。

氣のせいばかりでなく、ひと足ごとに、トナカイ・オロチョンのにおいが濃くなってゆくようだった。谷をはなれて尾根にかかったヤクト道が、ひとまがりすることに、ひょいとオロチョンの顔がのぞきそうな錯覚におそわれた。とうとう、道が尾根のうえの平坦面にでたとき、まばらなカラマツ林のなかに、オロチョンの一大ユルタ村があらわれた。ユルタが七つ、一〇―二〇メートル平方もあるトナカイのかこい場が四つ、そのほか大小さまざまの構造物……。ただし、みんなからっぽだった。もぬけのから、人のすみすてたあとの、うらぶれた感じは、まったくこうよぶのにふさわしかった。この数家族の集團は、昨年のおわりからここにあつまって、いっしょに冬をこし、すでに春はやく、さっきの舟着き場から河をわたって、どこへともなく移動してしまっていたのであった。もしいまもここにかれらが住んでいたとしても、われわれのような大部隊に、いきなりユルタを訪問されるほど、かれらは感のにぶい連中ではない。もしあやしいとみてとれば、さっと姿をくらすなり、あるいは先手をうってさきにわれわれをおとすれ、ちがった道を案内してやりすごしてしまうだろう。かれらの野獸におとらぬ神出鬼没ぶりを、われわれは、のちになっていやというほど思いしらされたのである。

かれらが、数家族ずつまとまって、集團的な冬営地をつくることは、すでに漠河隊の紀行にくわしくでているが、オロチョンのユルタといえは、あちらにひとつこちらにひとつ、森林のなかにちらばっているものだと思っ
ていた本隊のわれわれにとっては、この冬営地のあとの風景は、驚異的だった。ハンダハンやアカシカの皮を張

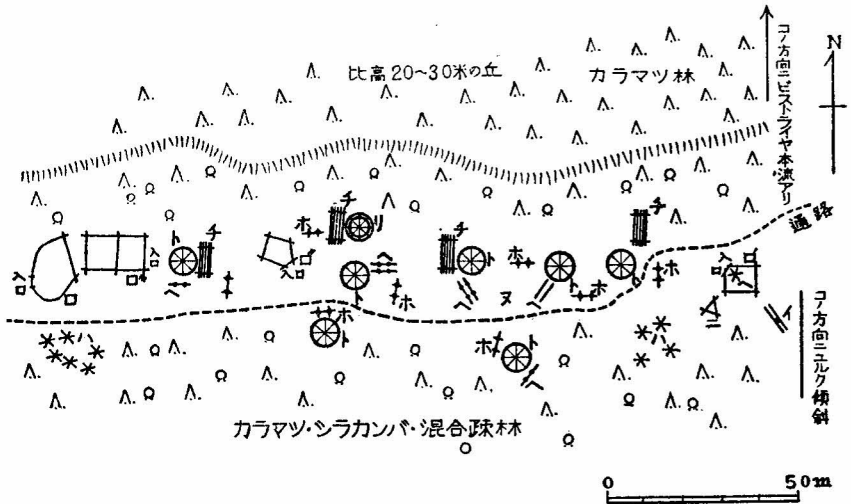


図 82. トナカイ・オロチョン冬営地の見取り図。ピストラヤ河上流、セ
ルムカン川附近、構造物の説明は、図83をみよ。

ってかわかす木のわく、ほし肉やいぶし肉をつくる台、小さなユルタのなかに台をつくったような肉おき場、細い丸太をならべた家具のおき場などは、とくに眼をひいた。トナカイのための虫よけの焚き火が、いたるところに立っている。石でつんだかまどもあった。すべてを通じて、馬オロチョンではとうていみられないゆたかさと、なたやナイフだけの細工とはおもわれぬ器用さとが、われわれの注意をひいた。まるで折り箱の板のように、うすくそいだ材であんだ肉いぶし用のすのこ、張った皮の伸縮に應じてわくの横木を調節する装置など、たしかに、ながい傳統によって洗練され固定された技術の美しさをもって、人の心をひきつけるものがあつた。われわれはまた、かわいいスキーの片ほうをひろってよろこんだ。長さ一二〇センチくらいで、はばひろく、あきらかにカラフトにすむヤクトやオロッコのつかう「ストー」とおなじ系統のものである。ただし、うらに毛皮は張りつけてなかつたが、ガイブシャンにきけば、やはり毛皮を張っ

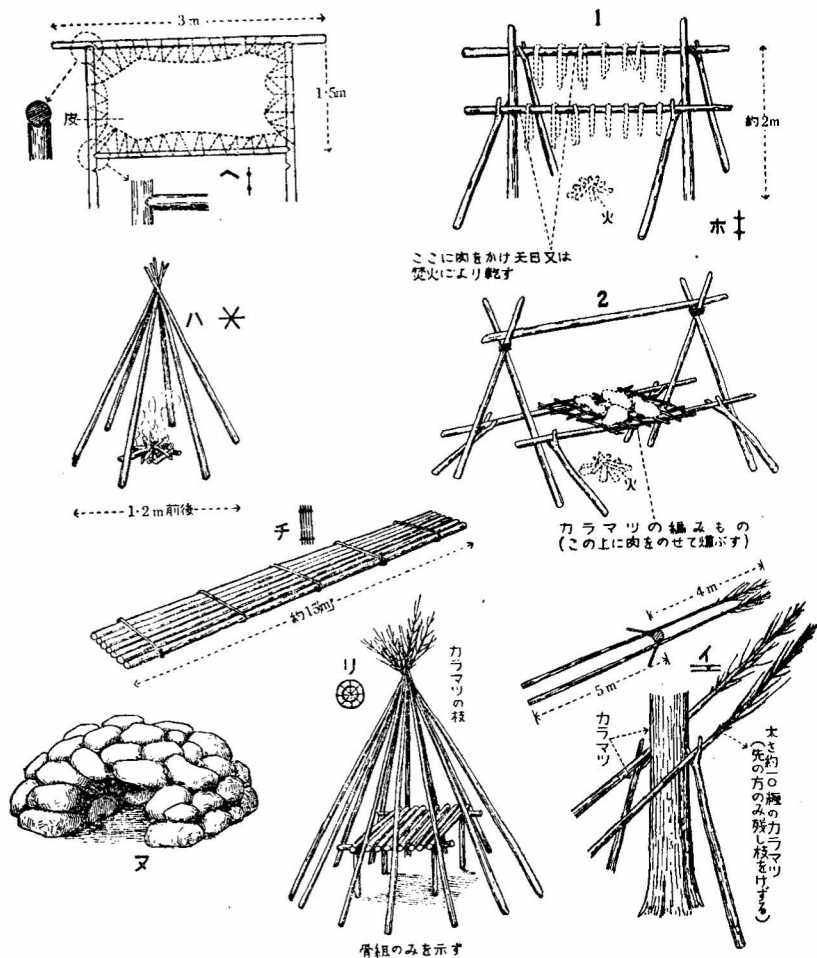


図 83. トナカイ・オロチョン冬営地の構造物 (配置については図82を
 みよ)。イ(用途不明)、ロ(トナカイの追いこみ)、ハ(トナカイ
 のための虫よけの焚き火)、ニ(用途不明の木組み)、ホ(肉乾
 し台、1および2)、ヘ(生皮を張ってかわかす木わく)、ト(ユル
 タ)、チ(家財家具をおく台、ユルタの外におき、布でおおう)、
 リ(ユルタ式の肉おき場)、ヌ(石のかまど)。



図 84. ドナカイ・オロチョンのスキー(キンナ), 120×20cm. カラマツ材でつくり、なめし皮の締め具をつけてある。割れめを縫いでつけたもの。

たものもつかうらしい。馬オロチョンもやはりスキーをもつが、もっと長く、締め具は、ただ横に一本の皮をわたして、靴につっかけ

るだけだという。

この多管地をあとにすると、いままであんなによくふまれていたヤクート道は、たちまち不明瞭となって、山火事あとの叢林のなかにきえてしまった。これも、ヤクート道の特徴のひとつである。タジモカンというかなり大きなつぎの支流の谷におりると、対岸にはもうひとつのものおきがみえ、オロチョンたちが徹夜でシカをまちぶせるという、シカの水のみ場もみられた。①タジモカンの谷におりたのは、本流から数キロも上流だったので、この支流の左岸づたいにふたたび本流の谷にでてテントを張った。ひるすぎからまたもや小雨となった空のしたに、サカイツツジの花が、いちめんに濕地をいろどっていた。

このあたりのピストラヤ本流の谷は、南北に走る山系を切っているとみえて、かなりひろい谷がひらけているかとおもうと、また急に山がせまって、急な崖のすそが流れにあらわれている場所もある。平均一日にふたつくらは、こうした崖がでてきて、あぶない崖すその河のなかをあるいたり、高壘きをさせられたりした。なるだけ行程をのばすために、われわれは本流ぞいの濕地をさけて、山すそのカラマツ林のなかを、ヤクート道ともシカの道ともつかぬふみあとをつたって、がむしゃらに西へ西へとあるいていった。急行軍のあと二日は、終日うっとりしい空から小雨がこぼれ、外とうのすきんをまぶかにおろしてあるいた、くらい森林の道は、支隊とわか

れたあとのわれわれの氣もちにふさわしかった。森のなかは、季節のあゆみにも鈍感だった。わずかに小川の水べりに、かわいい春の草が花をつけているばかりで、森林のしたは、どこまでいっても、冬とかわりない常緑のヒースばかりにおおわれていた。

崖の高巻きばかりのつづく日は、谷にそうであるというのに、ほとんどビストラヤの流れをみることもなかった。それでも、高巻きの道が、尾根の平坦面にまででると、どうかしたはずみに、カラマツのこずえをとうして、本流をかこむひろい谷や、河辺林にふちどられた白い河原が、ちらりと姿をのぞかせた。

雨についての行軍のかがあって、一二日の午後には、あとひと息でジン河合流点というところまでやってきた。しかし、ビストラヤの大屈曲点の直前は、峡谷のように両がわから山がせまっていて、さいごの崖があらわれた。航空写真をみて、どうやら崖ぶちをとおるぬげられるだろうと思っていたあてはずれて、増水した本流は、うずを巻いて崖のすそを水びたしにしていた。氣をゆるめたところで、高さ二〇〇メートルをこえる高巻きはつらかった。尾根のうえから右手をすかしてみると、いつのまにか峡谷をとおるすぎて、ひろいあかるい谷がみえている。どうやら合流点をとおるこして、ジン河の谷へ二―三キロはいりこんだらしかった。急な礫原の露出した斜面をすべりおりて、密生した林をぐりぬげると、ぱっとながめがひらけて、ガン河の中流らしい、二〇日ぶりに、ひろびろとした谷がみわたすかぎりひらけ、すぐ眼のまえにジン河の流れが蛇行していた。

〔註〕

- ① こういうシカにあつまる濕地を、コドロという。あるいは、土に塩分があるのかもしれないが、たしかめなかった。

空からの訪問

急行軍のつかれで、ぐっすり朝ねしたわたくしは、一一時ごろ、大テントから顔をだした。しばらくは眼もあけられないような、つよい日ざしだ。一夜のうちに、世界はすっかり夏だった。きのうまでのくらい雨のカラマツ林にくらべて、このあかるい谷の世界はどうだろう。ドロとヤナギの河辺林は、さながら緑のかたまりだ。テントのまえをながれるジン河の岸には、エゾノウワミズザクラの白い花が、いまをさかりと咲きみだれている。濕地に芽をだしたベイケイソウの、砲弾形の若芽のいきおいのよさ。オキナグサも、とうとう、しらがをふりみだしたような寒になってしまった。きのうの難行で、濕地の水びたしになった植物のおし葉を、一枚々々ひろげてゆくと、ひろげおわったころには、もうはじめのかわいている。まひるのテントのなかは、汗ばむような暑さだった。

夕ぐれには、いよいよ一五、一六、一七の三日間に、飛行機連絡をやるといってきた。われわれの位置をしらせるための返電の、ながい電文を暗号化するのに、無電テントは、ひるもよるもないほどいそがしい。

一三日は、一日のゆとりができたので、またふたつの偵察隊がでた。伴・山本・ガイブシヤンの三人は、ジン河をわたって本流の渡河点をさがしにでていった。吉良と小川とは、ジン河の右岸の小高い尾根に、展望をもとめにかけて。ナブタルダイのうらみをわすれないでいるわれわれは、シロコゴロフの本のなから、このピストラヤ屈曲点のちかくにキリチという高い山がある、という記事をさがしてきた。わたくしたちふたりの目は、尾根に立って、キャンプからは見とおしのきかない南—東のほうに、キリチをさがしてみようというのだ

った。尾根は、れいによって、ムラサキツツジとタイリクハンノキとの、すさまじいブッシュにとざされてい
た。馬にまたがったの山のぼりも、らくではない。馬はばかだから、じぶんの頭がとおりさえすれば、せなかの
人間にはおかまいなしに、やぶのなかでもどこでもくぐってゆくが、鞍のうえのものは、枝にはねおとされない
用心が必要だ。たづなは鞍にひっかけておいて、馬上大わらわでやぶくぐりをするという、あたらしい登山技術
をはじめてマスターしたのは、このときのことだった。

さて、そんなにして登ってはみたが、あまり見はらしはきかず、キリチらしいものもなく、みえるのは、例に
よって、うねうねとして特徴のない、老年期の山なみばかりだった。むなしくひきあげてきて、わたくしたちは
また谷へおりた。馬をひいて濕地をよこぎる途中のことである。ふと頭をあげてみると、ちょうど北々東のほ
う、本流の下流にあたる方角のながめがひらけて、おもいがけなくすっきりとがった山が、夕立ち雲のした
に、むらさき色にくっきりとうかびでていた。じっと眼をこらしてみると、それはたしかにナブタルダイ級のゴ
レッツであった。おもわぬひろいものの牧種をもってテントにかえてみると、やはり散歩にでた今西隊長も、
ちゃんとこの山をみつけてかえていた。野々垣さんは、その紀行のなかに、ピストラヤ中流の左岸に、オロチ
ョンのオーコリドイとよぶ富士山型の秀峯のあることをしるしている。これまでは、なんの気もなくそれをよみ
すごしていたが、まさしくこれがそのオーコリドイにちがいがなかった。「オーコリドイ、ふん、こんどはにがさ
ないぞ」、みんなが腹のそこでそうおもっていた。ゆくての目標が、またひとつふえたのである。

一方、伴の隊は、ジン河がわたれなくて、一里ちかくも逆にジン河をさかのぼり、ようやく向う岸へこした。
ジン河の右岸につづくきもちのよい草原を、一気に馬をとばせて本流にでてみると、ジン河をあわせて倍ちかい
大きくなったピストラヤはとうとうと濁水をあふれさせ、根こぎになったドロの大木が流されてきた。とうて

い荷をつんだ馬がわたれそうもない。われわれの予想では、ジン河の右岸には、デルブル河をへて三河へ交易に
でるオロチョンたちのおる道が、よくふみならされてついており、いたるところにオロチョンのあとがのこっ
ているだろうと考えていた。オロチョン道が、トナカイに必要なハナゴケをもとめて、枝谷から枝谷へと通じて
いるということが、本隊にはまだよくのみこめていなかったのだ。もちろん、馬オロチョンであるガイブシャン
にも、ぴんとこなかったらしい。数日まえから、「ヤクト銀座」などと名をつけてたのしみにしてきたここに
は、オロチョンのユルタらしいものもなく、ただ例のとおりきれぎれの、かすかなふみあとをみるにすぎなかつ
た。すっかり氣おちしてしまった三人は、馬をつないで本流の岸に腰をおろすと、そのままだれからともなく、
ぐっすりねこんでしまった。

テントでは、伴たちの帰りをまちわびて、カモ肉のスープをあつたためたりさましたりしていた。八時半をすぎ
てもまだかえらない。そろそろ、なにか異変があったのでは、という心配が、頭をもたげてきた。とにかく飯を
すませて、まだ帰らなければ搜索隊をだそうと、食事ははじめたとき、異様な声が対岸にひびいた。なんと形容
したらよいか、ざわめきのような、数人の坊さんが声をそろえて経をよんでいるような、とにかくそれは、腹の
そこからつめたくなるような、不気味なひびきを耳のそこにのこした。おりもわるかった。われわれは、すっか
り飯がますくなってしまった。しかし、飯がおわりかけて、ちょうど日のくれはじめたころ、上流から元氣なエ
ッホーの音がきこえて、おもわずほっとした。われわれは、ガイブシャンの顔をみるなり、まずいまの声をきい
たかとなすねた。かれは、げげんな顔をしていたが、大塚さんの説明をきくと、「ウィツカ」とこたえた。オオ
カミのなき声だったのだ。

一五日はよく晴れていたが、飛行機はこなかった。午前中漠河隊から爆音をきいたというしらせがあり、あわ

てて煙をあげたが、これはべつの飛行機だったらしい。しかし、これがよい予行演習になって、発煙筒よりも焚き火よりも、草原に火をつけるのが、いちばん能率的で有効らしいことがわかった。

一六日の朝は、とりわけ濃い朝霧がたちこめて、天氣をきづかわせた。しかし、朝はやくおきでみると、ミルク色の霧のなかには、数しれぬ小鳥の声がみちみちていて、晴れを予言していた。早朝から無電の交信がはじまり、大塚さんと郭さんとは、朝めしを食っているひまもない。一〇時半には、ハイラル出發、一時にはドラガチェンカ發と、つきつきと情報がはいる。一二時五〇分、はっきりと爆音がきこえ、アッというまに、本流の下流のほうから、河辺林のこすえすれすれに機影があらわれた。「なんだ、うちの飛行機じゃないか」と山本さんがつぶやいている。フォッカーのスーパーユニバーサル、少々時代おくれの單葉機だった。窓からちぎれるように振っている手がみえる。ひと旋回して、通信筒がおちた。「まずひらけ」という札のついたのをあげると、関東軍の松平さん、治安部の八木さん、ハイラルの島田參謀、満畜の松下さんなど、なつかしい人々の名が眼にはいった。こうして飛行機をチャーターしてくるには、かなりの費用がいったであろうに、さいごまでわれわれの計画をみとだけようという好意には、頭をさげるほかはなかった。二旋回、三旋回と高度はますますひくく、かんづめや菓子類などの箱が、落下傘もつけずに投下されてきた。五旋回で、機首は南にむかって、視野を去った。

さいごの通信筒によると、一行はドラガチェンカにとまり、あすもう一回くるとのことだった。われわれは、あくる一七日の朝はやく荷物をたたみ、ジン河とビストラヤとの合流点へと連絡地点をうつした。本流にのぞんだ、きもちのよい草原について、ひるめしをおわるころ、ふたたび飛行機があらわれた。きょうは、意外にも一二この荷物と通信筒とを、矢つきばやおとして、早々に姿を消した。漢河隊も支隊もみつからなかったため、